

そして、文末に“了”が置かれる場合はについて、杉村博文(1994)は以下のように主張している。

例えば、“你给花儿浇水了吗？”における“了”のように、文の末尾に置かれて述語全部につく“了”(「発生」を表す助詞)は二つの意味を表す。

〈Ⅰ〉述部が「食べる;勉強する」のような行為を述べる場合

- a) 発話時以前においてある行為が発生した。
- b) 発話時においてある動作行為が発生している。

〈Ⅱ〉述語が「太っている;食べられる」のような状態を述べる場合

- a) 発話時以前においてある状態が変化の結果として発生した。
- b) 発話時においてある状態が変化の結果として発生している。

(杉村博文 1994 : 43)

さらに、杉村博文(2017)は“了”についてさらに深く検討を行っている。それは「中国語では、動詞の後ろに「時態助詞」の“了”、“着”、“过”などをつけることによって時態を表すのが主な表現形式である。」と主張している。“了”については以下の例文を挙げて説明を行っている。

(90) 新娘子到了, 亲友们也差不多到齐了, 于是新房中的那张折叠桌便被抬至了中央, 并且张开了翅膀 从方到圆, 准备着承载第一次光荣的负荷。

(花嫁が到着した。客もほとんどそろった。そこで新婚夫婦の部屋にある例の折り畳み式のテーブルが真ん中に運ばれた。晴れのお役目というところだ。)

(91) 后来骂我的人也被警察剪去了辫子, 我就不再被人辱骂了。

(その後僕に悪態をついた連中もお巡りに弁髪を切られたので、それからはもう悪態をつかれることはなかった。)

(92) 在这件事上, 维娜站在了革命的一边, 她立了功, 所以我们发展她加入了红卫兵。

(この件で维娜は革命の側に立つことを証明しなから、あたしたちは维娜を紅衛兵に迎えることに決めたわけ。)

(93) 卫老婆子叫她祥林嫂, 说是自己母家的邻居, 死了当家人, 所以出来做工了。

(衛ばあさんは、彼女のことを祥林嫂とよんでいた。なんでも、衛ばあさんの実家のとなりのもので、亭主にしなれたために、奉公に出ることになったそうだ。)

以上の文の前後節にはそれぞれアスペクトマーカの“了”が使用されている。さらに、“了”には様々な機能がある。「時態助詞」であり、完成相または実現相を表す“了”を“了₁”を呼び、「時態語気助詞」で、主に実現相を表す“了”を“了₂”と呼ぶ。“了₁”と“了₂”によって表されているアスペクトはよく似ているため、よく合わせて用いられることが多い。

(杉村博文 2017: 202)

4.2.5 龚千炎(1995)の記述

龚千炎(1995)は「完了、実現時態は、動作行為の変化がすでに「発生」、「進行」、「完了」或いは状況、状態がすでに存在、実現していることを示している。出来事全体は已然の出来事である。また、このような時態は主に時態助詞“了₁”と時態語気詞“了₂”によって表す」と述べている。

〈I〉 “了₁”は主に「完了時態」を表し、あるときは「実現時態」も表す(龚千炎 1995:72)。また、“了₁”は静態性動詞の以外に、各種類の動詞の後ろに伴うことができる。例を挙げると以下の通りである。

- (94) 我请她坐在沙发上, 为她倒了一杯茶。 “了₁” : 「動作動詞」に付加
(彼女にソファに座ってもらい、彼女のために一杯のお茶を入れた。)
(龚千炎 1995:72)
- (95) 他跟 X 院长又谈了几分钟, 便起身告辞。 “了₁” : 「行為動詞」に付加
(彼はX院長とまた何分間を話し合った後に、すぐに帰った。)
(龚千炎 1995:72)
- (96) 我想了很长时间, 不知道该怎么办。 “了₁” : 「心理活動動詞」に付加
(私は長い時間考えてしまった、どうすれば良いが分からない。)
(龚千炎 1995:72)
- (97) 这家商场近来扩大了营业范围。 “了₁” : 「動作開始/終息動詞」に付加
(このデパートは近ごろ営業範囲を拡大してしまった。)
(龚千炎 1995:72)
- (98) 我拨开竹丛, 立即看到了和朱老太太家差不多大小的一所茅屋, 屋前的地面扫得像镜子一样光洁。 “了₁” : 「瞬間動詞」に付加
(私が竹かぶ押しのけて、すぐに朱おばちゃんの家と同じくらいの大きさのしげ茅ぶ(屋根)の家を見ってしまった、部屋の前の地面はまるで鏡のようにピカピカに掃除されていた。)
(龚千炎 1995:73)

〈II〉 “了₂”は主に「実現時態」を表し、一般的には状況が変化を発生したことを指

す。つまり、新しい状況が現れたら、「ある出来事の実現」と見なすことができる。さらに、文末に置くことによって、全文で記述している出来事を肯定し、状況の変化を表す。従って、しばしば「動詞述語文」と「形容詞述語文」の中に使用する(龚千炎 1995:75)。例を挙げると以下のものである。

- (99) 我猛抬头，瞥见那双勾人灵魂的女人水性的大眼了。 (龚千炎 1995:75)
(私は急に顔をあげると、(私の)心を誘う女のイキイキした大きな目が目に入った。)
- (100) 队伍接近矿山了。 (龚千炎 1995:75)
(軍隊が鉱山に近づいた。)
- (101) 直到太阳西斜了，才把几个猪头啦，一捆粉丝啦，给农场送去。(龚千炎 1995:75)
(日が沈んってしまったになるまで、やっといくつかの豚の頭、ひと束のはるさめを農場に送ってあげに行った。)
- (102) 小姑娘一天一天地大了。 (龚千炎 1995:75)
(少女は日々大きくなった。)

龚千炎(1995)によると(99)と(100)の文は「動詞述語」の文であり、(101)と(102)は「形容詞述語」の文であると主張し、この二種類中の“了₂”は異なる意味を示すと主張している。まず、(99)の文の中で“了₂”は「“瞥见大眼姑娘”という出来事が実現したばかり」の意を示し、(100)の「“接近矿山”は現れたばかりの状況である」という意を示す。と述べ、(101)の「“太阳西斜”は新しく現れた形式である」の意を示し、(102)は「“小姑娘变大”のは現在の状況である」の意を表すと述べた。

さらに、龚千炎(1995)は、“了₁”と“了₂”が表している時態は似ていることによって、しばしば一つの文の中に現れることができると述べる。

- (103) 我吃了₁饭了₂ (龚千炎 1995:76)

(103)の文の中で、“了₁”は「動作の完了」を表し、“了₂”は「状態の実現」を表している。このことから、“了₁”と“了₂”は「已然の出来事」の中に共起することができると分かる。

一方、「未然出来事」の中に“了₁”と“了₂”が共起することができない場合もある。

- (104)a. 喝了₁这碗水!
b. *喝了₁这碗水了₂ (龚千炎 1995:76)

以上の研究者の記述を参考に、“是……的”構文が“了”と共起するとき、「文がど

のような意味を表わすか、また、それぞれの文の要素にはどのような格役割があるか」について論理式を用いて、明示的に分析する。

さらに、ここでは主に龔千炎(1995)が述べている「時態助詞“了₂”」と「時態語気詞“了₂”」を参考に、時態を表す成分の“了”を動詞後の“了₁”(動作完了)と文末の“了₂”(状態の実現)に分類する。つまり、“了₁”は[完了]、“了₂”は[発生]という立場から形式意味論を用いて分析する。

4.3 “是……的”構文における“了”の論理分析

ここでは、4.2 で述べた時態成分の“了”を基に、“了”が“是……的”構文の中に使われる例を考え、(105)から(107)の例を論理式で示すことにする。

4.3.1 「完了・実現時態」成分：“领略了・奥妙了”の論理分析

(105) 这一番微妙的话，可难为了周为新的“工程”头脑，然而严仲平频频颌首，
显然是多少领略了其中的奥妙的。

(この微妙な言葉は、周为新の“工学(天才)”の頭を困らせた。しかし严仲平はしきりにうなずいている。明らかにその中の深い意味をいくらか理解したのだ。)

(杉村博文 1999 : 61)

(105)の例文の中で、下線部にある事態に対応する事件文は

了₁ 了₂

(105)a. “严仲平频频颌首，显然多少领略了其中的奥妙了” である。

[完了] [発生]

(105a)では“了₂”が存在するが、“的”が出現することによって(105a)の“了₂”は消去される。その理由について詳しく説明する。

動詞の後ろにある[完了]“了₁”が存在する理由は“领略”という心理活動を表す動詞があるので、“了”はその心理活動の実現を表すことができる。従って、“了”と“的”は共起することができる。

そして、文末にある[発生]の“了₂”が消去される理由は、“的”が出現すると「文全体(発生)を断定すること」になり、「発生」の意味が「断定」の対象の中に組み込まれてしまう。従って、“了₂”は再び使用する必要がない。詳しく説明すると、「発生」した出来事によって、「断定」の意味を付け加えることができる。つまり、出来事が発生しないと「断定」できない、「断定」した後に「発生」の必要がないからである。

上述のことから、“了”が“是……的”構文の中に共起するとき、文がどのような順序によって構成されるかが重要であるので、ここも第二章と同様に「演算過程」の角度

から、論理式を用いて分析する。

4.3.1.1 「第一過程」における分析

ここで、第一過程「格役割演算」を論理式で示すと次のようになる。(105a)の例の論理式は次の(105a')である。

サトル ~ガ ~ヲ デアル ~コトハ イクラカ
(105)a'. 领略' (严仲平, 奥妙) &有' {领略' (严仲平, 奥妙), 多少}
 シタ ~ガ 「実現」ヲ
 &有' [有' {领略' (严仲平, 奥妙), 多少}, 了₂]

この論理式は「严仲平が奥義を悟る、かつ、严仲平が奥義を悟ることは多少である。かつ、严仲平が奥義を悟ることが多少であることが〔実現〕をした」と読む。

(105a')に付与された「カタカナ表示」は説明のためのメタ言語である。以下、この(105a)がどのように構成されたかを詳しく説明する。(105a)の文において、“严仲平多少领略了奥妙”が「格役割成分」を有する文である、この場合の“严仲平”は「動作主格」であり、“奥妙”は「対象格」である。

さらに、この文は時態を表す“了”を有する意味論理式であり、“了”がある時点においては「格役割」はまだ存在していることが分かる。この場合の“了”は[発生]の意味を表す“了₂”であると考えられる。

4.3.1.2 「第二過程」における分析

次に、第二過程「時間点演算」について分析する。この段階では、第一過程「格役割演算」の基に、「時間点」を加えると以下の(105b)になる。

(105)b. 严仲平频频颌首, 显然多少领略了其中的奥妙了+[時間点]
(“了”は時態を表す)

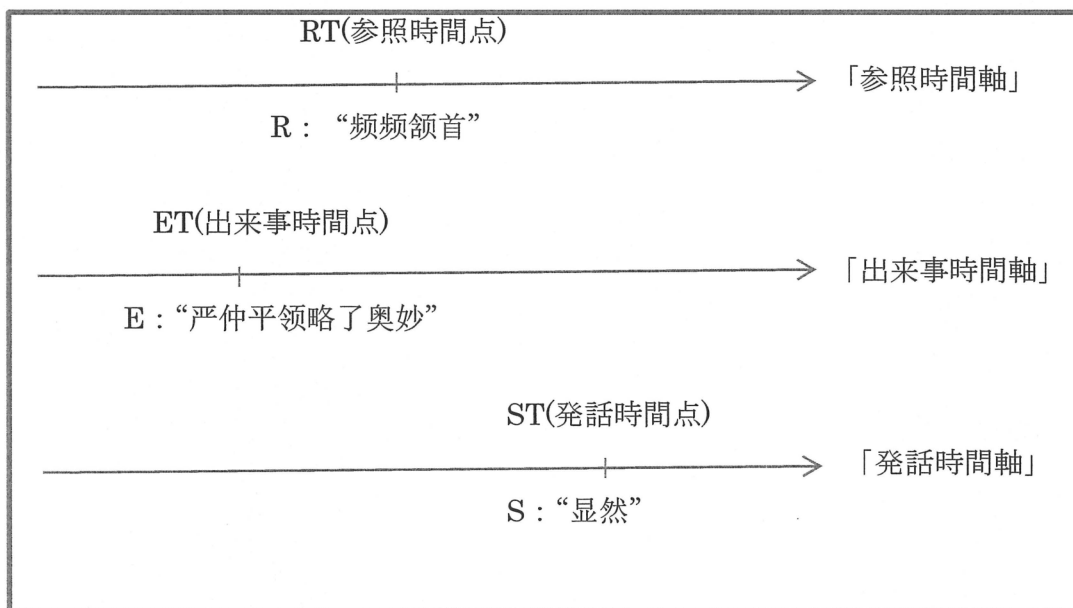
ここで、(105b)の文を論理式で示すと次の(105b')のようになる。

アル ~ガ ~デ 先行スル ~ガ ~ニ 先行スル ~ガ ~ニ トル ~ガ ~ヲ
(105)b'. 有' (了₂, ET) &<' (ET, RT) &<' (RT, ST) &有' (ST, 的)

この論理式は「“了”が出来事時間点(ET)である、かつ、出来事時間点(ET)が参照時間点(RT)に先行する、かつ、参照時間点(RT)が発話時間点(ST)に先行する、かつ、発話時間点(ST)が“的”をとる」と読む。

(105b) “严仲平多少领略了奥妙” という文では、“了”を加えると「時態」を決めることができ、時態が決まると参照時間点(RT)も決められる。“严仲平领略了奥妙”は出来事時間点(ET)であり、“频频颌首”は参照時間点(RT)である。

各時間点を明らかにするために、ここでは時間軸における「参照時間点(RT)」、「出来事時間点(ET)」、「発話時間点(ST)」の位置についてそれぞれを〈図 4-4〉で示す。



〈図 4-4: “严仲平频频颌首，显然多少领略了其中的奥妙了” の各時間軸〉

・時態“了”は以下〈図 4-5〉のように表す。



〈図 4-5: 出来事時間軸における“领略了₁”と“奥妙了₂”〉

〈図 4-4〉から〈図 4-5〉までから見ると、“领略”と“颌首”の発生時点は一致しない。出来事時間点(ET)が参照時間点(RT)に先行する。即ち、時間軸上において、出来事時間点は参照時間点より左に置かれる。

また、“频频颌首”(参照時間点(RT))は発話時間点(ST)より前にあることが“显然”という副詞により示される。「明らかである」ということの内容はすでに存在していなければならない。つまり「過去」を示すことで「時制」が決まり、時間点の演算が終わったと考えられる。以上のことから、この段階では「時間点演算」を用いて時間軸における各時間点について説明した。

4.3.1.3 「第三過程」における分析

第三過程「様相演算」について分析する。この段階では、第二過程「時間点演算」を基に、様相(断定)を表す成分“的”を加えると、以下の(16c)になる。

(105)c. 严仲平多少领略了奥妙的。

ここで、(105c)の文を論理式で示すと次の(105c')である。

アラワス ～ガ ～トイウ論理形式の集合ヲ

(105)c'. 有' (的, [様相]) & 有' ([様相], 断定)

エラブ ソノ集合ガ 要素 [断定] ヲ

この論理式は「“的”が[様相]という論理形式の集合を表す、かつ、[様相]がその集合の要素[断定]を選ぶ」と読む。

(105c)では、“严仲平多少领略了奥妙了+[時間点]”という文に“的”を挿入することにより[格役割]が消失し、断定(様相)の意味を追加することとなる。この段階は「様相演算」を用い、“的”が「断定」を表すことを説明した。

4.3.1.4 「第四過程」における分析

第四過程「焦点演算」について分析する。この段階では、第三過程「様相演算」の基に、焦点標識の“是”を加えると以下の(105d)になる。

(105)d. 严仲平是多少领略了奥妙的。

そこで、(105d)の文を論理式で示すと次の(105d')のようになる。

トル ～ガ ～トイウ論理形式の集合ヲ

(105)d'. 有' (断定, [焦点]) & 有' ([焦点], 多少)

アル ソノ [焦点] ガ ～デ

この論理式は「断定が[焦点]という論理形式の集合をとる、かつ、その[焦点]が“多少”である。」と読む。

(105d)の文において、焦点標識の“是”を挿入することによって焦点が分かる。それは“是”直後の“多少”である。従って、この段階は「焦点演算」を用い、「断定」が「焦点」を定めることを説明した。

これまで述べた時態成分“了₁”と“了₂”の“是……的”構文における成立過程を基に、(105)の全体の論理式を示すと(105')になる。

シタ ～ガ 「実現」ヲ

&有' [有' {领略' (严仲平, 奥妙), 多少}, 了₂]

アラワス ～ガ～トイウ論理形式の集合ヲ
 &有' (的, [様相]) &有' ([様相] , 断定)
 エラブ ソノ集合ガ 要素 [断定] ヲ

この論理式は「**严仲平が奥義を悟る、かつ、严仲平が奥義を悟ることは多少である。かつ、严仲平が奥義を悟ることが多少であることが〔実現〕をした、かつ、“了”が出来事時間点(ET)である、かつ、出来事時間点(ET)が参照時間点(RT)に先行する、かつ、参照時間点(RT)が発話時間点(ST)に先行する、かつ、発話時間点(ST)が“的”をとる、かつ、“的”が〔様相〕という論理形式の集合を表す、かつ、〔様相〕がその集合の要素〔断定〕を選ぶ、かつ、断定が〔焦点〕という論理形式の集合をとる、かつ、その〔焦点〕が“多少”である。**」と読む。

まず、「**严仲平が奥義を悟る、かつ、严仲平が奥義を悟ることは多少である。かつ、严仲平が奥義を悟ることが多少であることが〔実現〕をした**」という部分は「格役割演算」を表す式である。次に、「**“了”が出来事時間点(ET)である、かつ、出来事時間点(ET)が参照時間点(RT)に先行する、かつ、参照時間点(RT)が発話時間点(ST)に先行する、かつ、発話時間点(ST)が“的”をとる。**」という部分は「時間点演算」を表す式である。

89

点]という論理形式の集合をとる、かつ、その[焦点]が“多少”である。」という部分は「焦点演算」を表す式である。

上述の四つの過程を経て(105)の文について論理分析を行った。以上の分析を総合する、“了₁”は「完了」の意味を示し、“了₂”は「発生断定」の意味を示す。また、文中の“的”は…[完了]、[過去]、[断定]の意味を表すことが分かる。

4.3.2 「完了・実現時態」成分：“吃了・死了”の論理分析

次に例(106)について述べる。

- (106) 至于种牛的死因，通过调查，我发现没有人下过毒，
是种牛自己吃了有毒的草，中毒死的。（次仁罗布《阿米日嘎》）
（種牛が亡くなった原因については、調査を通じて、私は誰も毒を入れていない
ことを発見した。種牛は自分で毒がある草を食べて、中毒で死んだのだ。）

(106)の例文の中で、下線部にある事態に対応する事件文は次の(106a)である。

- | | |
|-------------------------|----------------|
| 了 ₁ | 了 ₂ |
| (106)a. 种牛自己吃了有毒的草，中毒死了 | |
| [完了] | [発生] |

(106a)に“了₂”が存在するが、“的”が出現することによって“了₂”は消去される。その理由について詳しく説明する。

動詞の後ろにある[完了]の意を表す“了₁”が存在する理由は持続活動動詞の“吃”があるので、“了₁”と結びつくことができる。従って、“了”と“的”は共起することができる。文末にある[発生]の意を表す“了₂”が消去される理由は、(106a)で述べたように、すでに「発生」した事件に対し、“的”が出現すると「発生」の意味が「断定」の対象に組み込まれて、「文全体が断定」を示すからである。

4.3.2.1 「第一過程」における分析

ここで、第一過程「格役割演算」を論理式で示すと次のようになる。(106a)の例の論理式は次の(106a')である。

タベル ~ガ ~ヲ イタル ~コトガ ~ニ
 (106)a'. 吃' (種牛, 毒草) &到' { 吃' (種牛, 毒草), 死' (種牛) }

シタ ~ガ 「完了」ヲ
 &到' [有' {吃' (種牛, 毒草), 死' (種牛) }, 了₂]

この論理式は「種牛が毒草を食べる、かつ、種牛が毒草を食べることが死ぬに至る、かつ、種牛が毒草を食べることが死ぬに至ることが[完了]をした」と読む。

(106a)の文を中国語の意味に従って考察すると「種牛は毒がある草を食べたので亡くなった」である。また“種牛吃了毒草死”という文では[持続動詞]の“吃”と[瞬間動詞]“死”に“了”を加えると「~してしまう(食べてしまう・亡くなってしまう)」という[完了]の意味があり、[時態]を決めることができる。

この文は「格役割成分」を有する文であり、この場合の“種牛”は「動作主格」であり、“毒草”は「対象格」である。さらに、この文は時態を表す“了”が存在する部分の論理式であり、“了”がある時点においては「格役割」の演算は終了せず、まだ存在していることが分かる。

4.3.2.2 「第二過程」における分析

次に、第二過程「時間点演算」について分析する。この段階では、第一過程「格役割演算」を基に、「時間点」を加えると以下の(106b)になる。

(106)b. 種牛自己吃了有毒的草, 中毒死了 +[時間点] (“了”は時態を表す)

そこで、(106b)の文を論理式で示すと次の(106b')のようになる。

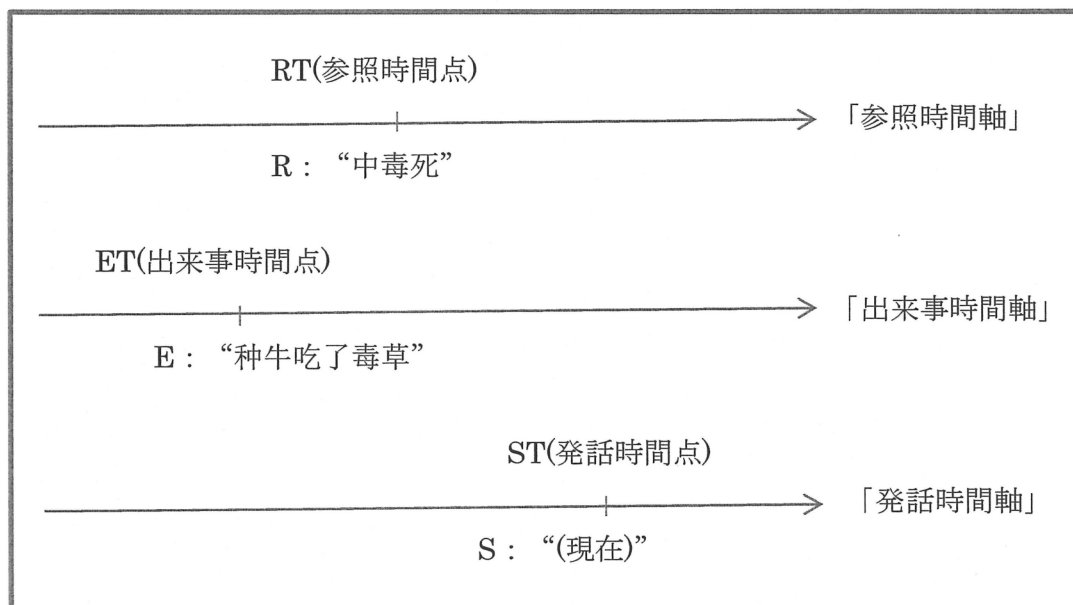
アル ~ガ ~デ 先行スル ~ガ ~ニ 先行スル ~ガ ~ニ トル ~ガ ~ヲ
 (106)b'. 有' (了₂, ET) &<' (ET, RT) &<' (RT, ST) &有' (ST, 的)

この論理式は「“了₂”が出来事時間点(ET)である、かつ、出来事時間点(ET)が参照時間点(RT)に先行する、かつ、参照時間点(RT)が発話時間点(ST)に先行する、かつ、発話時間点(ST)が“的”をとる」と読む。

(106b)では、“種牛吃了毒草死了”という文では、“了₁”を加えると「時態」を決めることができ、時態が決まると参照時間点も決められる。文中の“種牛吃了毒草”は出来

事時間点(ET)であり、“死”は参照時間点(RT)である。

さらに、各時間点を明らかにするために、ここでは時間軸における「参照時間点(RT)」、「出来事時間点(ET)」、「発話時間点(ST)」の位置についてそれぞれを〈図 4-6〉で示す。



〈図 4-6：“种牛自己吃了有毒的草，中毒死了”の各時間軸〉

・時態“了”は〈図 4-7〉を示すと以下のようなになる。



〈図 4-7：出来事時間軸における“吃了₁”と“死了₂”〉

この図から、“吃”と“死”の発生時点は一致しない。その理由は、「食べる」という動作があつて、その後“死ぬ”に至ることになるからである。つまり、“吃”と“死”の間に「因果関係」が存在するから、発生する時点も異なる。従つて、出来事時間点(ET)が参照時間点(RT)に先行する。即ち、時間軸上において、出来事時間点(ET)は参照時間点(RT)より左に置かれる。ここでは「<」(ET, RT)」で表す。

しかし、注意すべきことは、すべての文の中で“了₁”と“了₂”は「因果関係」というわけではなく、「順序関係」関係も存在する。ここで(106b)の文は“吃(原因)”と“死(結果)”の間は「因果関係」であると見なすということである。

また、“死”(参照時間点 RT)は発話時間点(ST)より前にあることで「時制」が決まり、時間点の演算が終わつたと考えられる。ここでは、「<」(RT, ST)」で表す。以

上のことから、この段階では「時間点演算」を用いて時間軸における各時間点について説明した。

4.3.2.3 「第三過程」における分析

第三過程「様相演算」について分析する。この段階では、第二過程「時間点演算」を基に、様相(断定)を表す成分“的”を加えると以下の(106c)になる。

(106)c. 种牛自己吃了有毒的草，中毒死的。

ここで、(106c)の文を論理式で示すと次の(106c')のようになる。。

アラワス ～ガ ～トイウ論理形式の集合ヲ

(106)c'. 有' (的, [様相]) & 有' ([様相], 断定)

エラブ ソノ集合ガ 要素 [断定] ヲ

この論理式は「“的”が[様相]という論理形式の集合を表す、かつ、その集合の要素が[断定]を選ぶ」と読む。

(106c)では、“种牛吃了毒草死了”という文に“的”を挿入することにより[格役割]が消失し、断定(様相)の意味を追加することとなる。

4.3.2.4 「第四過程」における分析

第四過程「焦点演算」について分析する。この段階では、第三過程「様相演算」を基に、焦点標識の“是”を加えると以下の(106d)になる。

(106)d. 是种牛自己吃了有毒的草，中毒死的。

そこで、(17d)の文を論理式で示すと次の(106d')のようになる。

トル ～ガ ～トイウ論理形式の集合ヲ

(106)d'. 有' (断定, [焦点]) & 有' ([焦点], 种牛)

アル ソノ [焦点] ガ ～デ

この論理式は「断定が[焦点]という論理形式の集合をとる、かつ、その[焦点]が“种牛”である。」と読む。

(106d)では、“种牛吃了毒草死的”という文に焦点標識の“是”を挿入することにより焦点が決められるので、焦点は“是”の直後にある“种牛”である。

4.3.2.5 各演算の全体の論理式

これまで述べた時態成分“了₁”と“了₂”の“是……的”構文における成立過程を基に、(106)の全体の論理式を示すと(106')になる。

タベル ~ガ ~ヲ イタル ~コトガ ~ニ
(106)' 吃' (種牛, 毒草) & 到' {吃' (種牛, 毒草), 死' (種牛) }

シタ ~ガ 「完了」ヲ
& 到' [有' {吃' (種牛, 毒草), 死' (種牛) }, 了₂]

アル ~ガ ~デ 先行スル ~ガ ~ニ 先行スル ~ガ ~ニ トル ~ガ ~ヲ
& 有' (了₂, ET) & <' (ET, RT) & <' (RT, ST) & 有' (ST, 的)

アラワス ~ガ ~トイウ論理形式の集合ヲ

& 有' (的, [様相]) & 有' ([様相], 断定)

エラブ ソノ集合ガ 要素 [断定] ヲ

トル ~ガ ~トイウ論理形式の集合ヲ

& 有' (断定, [焦点]) & 有' ([焦点], 種牛)

アル ソノ [焦点] ガ ~デ

この論理式は「種牛が毒草を食べる、かつ、種牛が毒草を食べることが死ぬに至る、かつ、種牛が毒草を食べることが死ぬに至ることが[完了]をした、かつ、“了₂”が出来事時間点(ET)である、かつ、出来事時間点(ET)が参照時間点(RT)に先行する、かつ、参照時間点(RT)が発話時間点(ST)に先行する、かつ、発話時間点(ST)が“的”をとる、かつ、“的”が[様相]という論理形式の集合を表す、かつ、[様相]がその集合の要素[断定]を選ぶ、かつ、断定が[焦点]という論理形式の集合をとる、かつ、その[焦点]が“多少”である。」と読む。

この論理式は四つの演算過程によって構成される。

まず、「種牛が毒草を食べる、かつ、種牛が毒草を食べることが死ぬに至る、かつ、種牛が毒草を食べることが死ぬに至ることが[完了]をした」という部分は「格役割演算」を表す式である。次に、「了₂」が出来事時間点(ET)である、かつ、出来事時間点(ET)が参照時間点(RT)に先行する、かつ、参照時間点(RT)が発話時間点(ST)に先行する、かつ、発話時間点(ST)が“的”をとる」という部分は「時間点演算」を表す式である。

さらに、「“的”は「様相」という論理形式の集合を表す、かつ、その集合が要素〔断定〕を選ぶ」という部分は「様相演算」を表す式である。最後に、「断定が〔焦点〕という論理形式の集合をとる、かつ、その〔焦点〕が“种牛”である。」という部分は「焦点演算」を表す式である。

上述のように、四つの過程を経て(17)の文について論理分析を行った。さらに、以上の分析を総合すると、文中の“了₁”は〔完了〕、“了₂”は〔発生〕の意を表し、“的”は…〔完了〕、〔過去〕、〔断定〕の意味を表すことが分かる。

4.3.3 「完了・実現時態」成分：“来了・医生了”の論理分析

さらに(107)について述べる。

(107) 妈妈是打电话叫来了医生的。 (何元建 2011:400)

(母は電話を掛けて医者さんと呼んできたのだ。)

(107)の事態に対応する事件文は次の(107a)である。

了₁ 了₂

(107)a. 妈妈打电话叫来了医生了

〔完了〕〔発生〕

4.3.3.1 「第一過程」における分析

ここで、第一過程「格役割演算」を論理式で示す。(107a)の論理式は(107a')である。

カケル ～ガ ～ヲ イタル ～ガ ～ニ 来ル

(107)a'. 叫'〔妈妈, 医生, 打' (妈妈, 电话) & 到' (电话, 医生), 来' (医生)〕

サセル ～ガ ～ニ

～コトヲ

シタ

&有'〔打' (妈妈, 电话) & 到' (电话, 医生) & 来' (医生), 了〕

～コトガ

「発生」ヲ

この論理式は「母が医者に、母が電話を掛ける、かつ、電話が医者に至ることをさせる、かつ、母が電話を掛けて医者と呼んで来ることが〔完了〕をした。」と読む。

(107a)の文を中国語の意味に従って考察すると「母が電話を掛けて医者さんと呼んできました」である。また“妈妈打电话叫来了医生了”という文では“叫来”に“了”を加えると〔完了〕の意味があり、〔時態〕を決めることができる。

この文は「格役割成分」を有する文であり、この場合の“妈妈”は「動作主格」で、“电话”は「道具格」であり、“医生”は「(使役)対象格」である。さらに、この文は時態を表す“了”に関わる部分の意味論理式であり、“了₁”がある時点においては「格役割」の演算は終了せず、まだ存在している。

4.3.3.2 「第二過程」における分析

次に、第二過程「時間点演算」について分析する。この段階では、第一過程「格役割演算」を基に、「時間点」を加えると以下の(107b)になる。

(107)b. 妈妈打电话叫来了医生了 +[時間点](“了”は時態を表す)

そこで、(107b)の文を論理式で示すと次の(107b')のようになる。

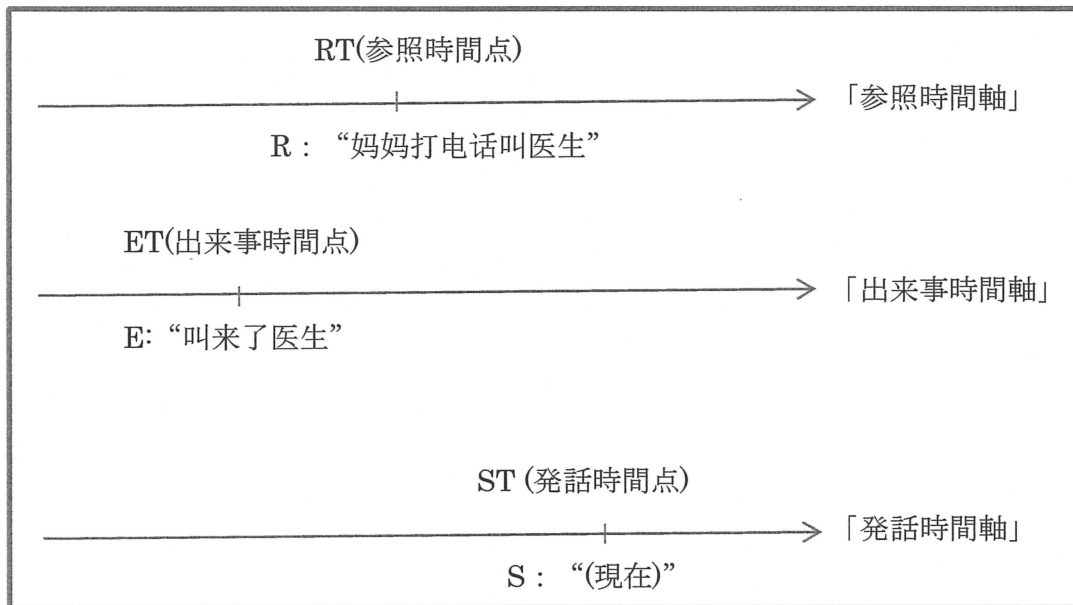
アル ~ガ ~デ 先行スル ~ガ ~ニ 先行スル ~ガ ~ニ トル ~ガ ~ヲ

(107)b'. 有' (了₁, ET) &<' (ET, RT) &<' (RT, ST) &有' (ST, 的)

この論理式は「“了₁”が出来事時間点(ET)である、かつ、出来事時間点(ET)が参照時間点(RT)に先行する、かつ、参照時間点(RT)が発話時間点(ST)に先行する、かつ、発話時間点(ST)が“的”をとる」と読む。

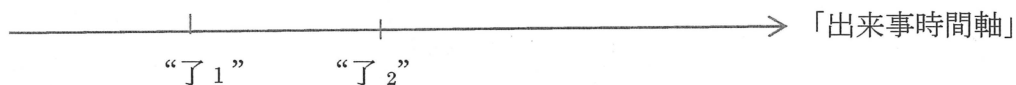
(107b)の“妈妈打电话叫来了医生”という文では、“了”を加えると「時態」を決めることができ、時態が決まると出来事時間点(ET)も決められる。“妈妈打电话”は参照時間(RT)であり、“医生来了”は出来事時間点(ET)である。

さらに、各時間点を明らかにするために、ここでは時間軸における“参照時間点(RT)”、“出来事時間点(ET)”、“発話時間点(ST)”の位置についてそれぞれを〈図4-8〉で示す。



〈図 4-8：“妈妈打电话叫来了医生了”の各時間軸〉

- ・時態“了”は〈図 4-9〉を示すと以下のようなになる。



〈図 4-9：出来事時間軸における“医生了₁”と“叫来了₂”〉

この図から“来”と“打”の発生時点は一致しない、出来事時間点(ET)が参照時間点(RT)に先行する。即ち、時間軸上において、出来事時間点は参照時間点より左に置かれる。ここでは「<’ (ET, RT)」で表す。

また、“妈妈打电话叫医生”(参照時間点 RT)は発話時間点(ST)より前にあることで「時制」が決まり、時間点の演算が終わったと考えられ、「<’ (RT, ST)」で表す。以上のことから、この段階では「時間点演算」を用いて時間軸における各時間点、及び“了”について説明した。

4.3.3.3 「第三過程」における分析

第三過程「様相演算」について分析する。この段階では、第二過程「時間点演算」を基に、様相(断定)を表す成分“的”を加えると以下の(107c)になる。

(107)c. 妈妈打电话叫来了医生的。

ここで、(107c)の文を論理式で示すと次の(107c')のようなになる。

アラワス ～ガ ～トイウ論理形式の集合ヲ

(107)c'. 有' (的, [様相]) & 有' ([様相], 断定)

エラブ ソノ集合ガ 要素 [断定] ヲ

この論理式は「“的”が[様相]という論理形式の集合を表す、かつ、その集合の要素が[断定]を選ぶ」と読む。また(107c)では、“妈妈打电话叫来了医生了”という文に“的”を挿入することにより[格役割]が消失し、断定(様相)の意味を追加することとなる。

4.3.3.4 「第四過程」における分析

第四過程「焦点演算」について分析する。この段階では、第三過程「様相演算」の基に、焦点標識の“是”を加えると、以下の(107d)になる。

(107)d. 妈妈是打电话叫来了医生的。

そこで、(107d)の文を論理式で示すと次の(107d')である。

トル ～ガ ～トイウ論理形式の集合ヲ

(107)d'. 有' (断定, [焦点]) & 有' ([焦点], 打电话)

アル ソノ [焦点] ガ ～デ

この論理式は「断定が[焦点]という論理形式の集合をとる、かつ、その[焦点]が“打电话”である。」と読む。(107d)では、“妈妈打电话叫来了医生的”という文に焦点標識の“是”を挿入することにより焦点が決められるので、焦点は“是”の直後にある“打电话”である。

4.3.3.5 各演算の全体の論理式

これまで述べた時態成分“了₁”と“了₂”の“是……的”構文における成立過程を基に、(107)の全体の論理式を示すと(107')になる。

カケル ～ガ ～ヲ イタル ～ガ ～ニ 來ル
 (107) 叫' [妈妈, 医生, 打' (妈妈, 电话) & 到' (电话, 医生), 来' (医生)]
 サセル ～ガ ～ニ ～コトヲ

シタ

&有' [打' (妈妈, 电话) & 到' (电话, 医生) & 来' (医生), 了]
 ～コトガ 「発生」ヲ

アル ～ガ ～デ 先行スル ～ガ ～ニ 先行スル ～ガ ～ニ トル ～ガ ～ヲ
 &有' (了₁, ET) &<' (ET, RT) &<' (RT, ST) &有' (ST, 的)

アラワス ～ガ ～トイウ論理形式の集合ヲ

&有' (的, [様相]) &有' ([様相], 断定)
 エラブ ソノ集合ガ 要素 [断定] ヲ

トル ～ガ ～トイウ論理形式の集合ヲ

&有' (断定, [焦点]) &有' ([焦点], 打电话)
 アル ソノ [焦点] ガ ～デ

この論理式は「母が医者に、母が電話を掛ける、かつ、電話が医者に至ることをさせる、かつ、母が電話を掛けて医者を呼んで来ることが[完了]をした、かつ、“了₁”が出来事時間点(ET)である、かつ、出来事時間点(ET)が参照時間点(RT)に先行する、かつ、参照時間点(RT)が発話時間点(ST)に先行する、かつ、発話時間点(ST)が“的”をとる、かつ、“的”が[様相]という論理形式の集合を表す、かつ、[様相]がその集合の要素[断定]を選ぶ、かつ、断定が[焦点]という論理形式の集合をとる、かつ、その[焦点]が“打电话”である。」と読む。

この論理式は四つの演算過程によって構成される。

まず、「母が医者に、母が電話を掛ける、かつ、電話が医者に至ることをさせる、かつ、母が電話を掛けて医者を呼んで来ることが[完了]をした」という部分は「格役割演算」を表す式である。次に、「“了₁”が出来事時間点(ET)である、かつ、出来事時間点(ET)が参照時間点(RT)に先行する、かつ、参照時間点(RT)が発話時間点(ST)に先行する、かつ、発話時間点(ST)が“的”をとる。」という部分は「時間点演算」を表す式である。

さらに、「“的”は「様相」という論理形式の集合を表す、かつ、その集合が要素[断定]を選ぶ」という部分は「様相演算」を表す式である。最後に、「断定が[焦点]

という論理形式の集合をとる、かつ、その[焦点]が“打电话”である。」という部分は「焦点演算」を表す式である。

上述の四つの過程を経て(107)の文について論理分析を行った。さらに、以上の分析を総合して、文中の“了₁”は[完了]、“了₂”は[発生]の意を表し、“的”は…[完了]、[過去]、[断定]の意味を表すことが分かる。

4.4 本章のまとめ

本章では、時態を表す成分“了”が“是……的”構文の中に共起する場合において、文が「格役割演算」、「時間点演算」、「様相演算」と「焦点演算」を経て構成されることを示した。

また、時態を表す成分の“了”を動詞後の“了₁”(動作完了)と文末の“了₂”(状態の発生)に分けて、論理式を用い分析することができることを示した。さらに、すでに「発生」した出来事に対し、“的”が出現すると「発生」の意味が「断定」の対象に組み込まれて、「文全体が断定」を示すからである。簡単にまとめると、「発生」した出来事によって、「断定」の意味を付け加えることができる。つまり、出来事が発生しないと「断定」できない、「断定」した後に「発生」の必要がないからである。

第5章 時態成分“着”が共起する場合の意味と論理分析

5.0 はじめに

本章では、時態成分“着”が“是……的”構文と共起する場合の意味と論理構造について述べる。時態は時間体系を構成する概念の一つである。中国語の時間体系についての先行研究には呂叔湘(1994)、龔千炎(1995)、陸儉明(1999)、木村英樹(1983)、杉村博文(1994)などの研究がある。ここでは、それぞれの研究を紹介し、主として龔千炎(1995)の研究に基づき時態について説明し、本論における時態成分“着”の意味と論理式について述べる。

5.1 時態成分の“着”に関する考察

ここでは「已然時態」、「単純時態」及び「未然時態」における「進行・持続」を表す成分“着”の論理的役割と意味について検討する。

[仮説 1] 時態を表す成分の“着”は「結果の持続」であり、時制を表す成分の“在”と共起すると、参照時間軸上における「已然」、「単純」、「未然」である。

5.1.1 呂叔湘(1980)の記述

呂叔湘(1980)は「“着”は動作進行体を表す」と主張している。さらに、“着”を三種類に分け、以下のように分類する。

- 〈Ⅰ〉動作がちょうど進行していることを表す。
- 〈Ⅱ〉状態の持続を表す。
- 〈Ⅲ〉存在文に用いて、ある種の姿勢が存在することを表す。

5.1.2 龔千炎(1995)の記述

龔千炎(1995)は「“着”は主に持続を表し、また動作行為の進行を表す」と述べている。まず、龔千炎(1995)が挙げた“着”が「持続」を表す例である。

(108) 黄耀祖架起一只脚来，悠悠地晃悠着。 「動作の持続」

(黄耀祖は片足を組んでいて、悠然とぶらぶらしている。)

(109) 有一个时候，他狠狠地看着我们，眼睛闪烁不定，充满仇恨。 「行為の持続」

(あるとき、彼は憎々しそうに私たちを見ていて、目はギラギラして、恨みに満ちていた。)

(110) 他费力的思索着，回忆着…… 「心理活動の持続」

(彼は、力を尽くして考え(ている)、思い出している。)

- (111) 我坐着，心里像从来那样，茫然而游移。 「姿勢の持続」
 (私は座っている、心の中はまるで昔みたいに、茫然と迷う。)
- (112) 车站有一截矮矮的砖墙，贴着花花绿绿的标语。 「静態の持続」
 (駅には一つ低いレンガ壁があり、彩やかな標語が貼ってある。)
- (113) 我心里迟疑着，身躯却一下子就跳起来了。 「心理状態の持続」
 (私は心の中で迷っているが、体はぱっと跳び上がった)
- (114) 光线被人影纷乱着，黑黑的肩背也不住晃动。 「状態の持続」
 (明かりが人影で乱れている、黒い肩も止まることなく揺れる。)

次に“着”における「動作行為の進行」の例を挙げる。

- (115) 黄耀祖就在我前面走着，时而对着山谷呼叫，时而又胡乱地拍腿，挥动手臂，
 仿佛很快活似的。 「動作行為の進行」
 (黄耀祖が私の前で歩いている、ときどき谷に向かって叫んでいる、時にはそそく
 さと足を叩き、腕を振り、とても楽しそうだ。) (龚千炎 1995 : 89)

以上、龚千炎(1995)の用例から持続できる動詞と一部分の形容詞が“着”を伴うことができる。しかし、“着”を伴うことができない動詞も存在する。それは瞬間動詞の“死(しぬ)”、“塌(崩れる)”、“垮(倒れる)”、“炸(爆発する)”、“断(切れる)”、“熄(消える)”、“跌(転ぶ)”、“到(至る)”、“丢(無くす)”、“牺牲(犠牲する)”、“离开(離れる)”、“停止(やめる)”などの動詞である。

5.1.3 陆俭明(1999)の記述

陆俭明(1999)は「“着”の语法意义表述为“表示行为动作或状态的持续”。“行为动作的持续”是一种动态的持续，“状态的持续”是一种静态的持续。(“着”の文法意味は“動作行為或いは状態の持続を表す”ことである。“行為動作の持続”は動態の持続であり、“状態の持続”は静態の持続である。)」と述べる。

この中で“動態の持続”は以下の二種類に分けられる。

〈I〉指处于行为动作从开始到结束的过程中。(動作行為が開始から終息までの過程
 中にあることを指す。)

- (116) 你在这儿等着，可不能走开。
 (君はここで待っていて、絶対に離れないでね。)
- (117) 你跟着他! (君が彼のそばについていてね!)

〈Ⅱ〉指从开始到结束的过程极短的行为动作反复进行。(開始から終息(終わる)までの過程の極めて短い行為(動作)が繰り返して進行することを指す。)

(118) 她轻轻地敲着, 生怕惊醒了孩子。

(彼女は軽く叩いている、子供が驚いて目を覚ますことを心配する。)

(119) 他渴极了, 倒了一大碗凉白开水就大口大口地喝着。

(彼は酷く喉が渴いた、一まわり大きめの茶碗に水を入れた後にゴクゴク飲んでいる。)

さらに、“静態の持続”も以下の二種類に分けている。

〈Ⅰ〉指人或动物一直保持由某种行为动作所造成的姿态。(人或いは動物がずっとある種の動作行為によって引き起こした姿態を維持することを指す。)

(120) 你不用老站着, 累了可以坐一会儿。

(君はずっと立っている必要がない、疲れたら少し座ることができるよ。)

(121) 她靠着窗户坐着。(彼女は窓に寄りかかって、座っている。)

(122) 蹲着, 别起来! (しゃがんだままで、立ち上がらないでね!)

〈Ⅱ〉指在某种行为动作的作用下, 事物始终呈现某种状态。(ある種の動作行為の作用中に、事物が終始ある種の状態で現れることを指す。)

(123) 墙上挂着一幅画。(壁に一枚の絵が掛かっている。)

(124) 领子上绣着两朵花。(襟に二輪の花が刺繍してある。)

(陆俭明 1999 : 332)

5.1.4 木村英树(1983)の記述

木村英树(1983)は「“着”は二種類に分けられ、“着₁”は動作が進行していることを表し、“着₂”は状態の持続を表示する」と述べる。

5.1.5 杉村博文(1994)の記述

杉村博文(1994)は「“着”は二種類に分けられ、それは“存在助詞の着”と“持続助詞の着”である。」と主張している。

〈Ⅰ〉存在助詞の“着”は動詞について動作行為の開始後或いは現実化後に残った結果を表す。「……という状態で(～に)存在している」意味を示す。

〈Ⅱ〉“持続助詞の“着”は動作行為それ自体が開始後あるいは実現後に「一定の状態を保っている」ことを表す。(杉村博文 1994 : 103-105)

以上、諸研究を参考にすると、“着”が“是……的”構文の中に生起するとき、“着”^(注8)がどのような持続を表すか、また、“着”を含む文はどのように構成されるかが重要であると考えられる。ここでは「演算過程」を論理式を用いて分析し、[仮説1]をたて理由を説明したい。

5.2 “是……的”構文における“着”の論理分析

5.2.1 「時態+時制」の“在”と共起する“着”の論理分析

まず、[進行・持続時態]の[根拠1]となる用例を見てみよう。

(125) 可见，戏曲里的行当也是在不断变化，发展着的。 (文艺，151页)
(袁毓林 2003: 12)

(このことからかわるのは、劇曲中の役柄も絶え間なく変わり、
発展し続けているのだということだ。)

(125)の文で注目されるのは“是……的”構文の中に“在”と“着”が共起することである^(注9)。龚千炎(1995:89)は“在”と“着”が共起する文は「進行、持続時態である」と述べる。この類の時態は「動作行為の変化が今ちょうど進行しているところ、或いは状況状態の持続を表す。」と主張し、主に、時態助詞“着”が「持続」を表し、“時態副詞”“在、正在、正”が「進行」を表わすと述べている。

現代中国語において、“在”は「前置詞」と「副詞」の二つの品詞で用いられる。青木萌(2013)は、「絶対時間」と「相対時間」の二つの角度から時間副詞“在”と時制の関係について論じ、「時態となる“在”は副詞、前置詞を問わず「～が、～において、～という様態にある」と解しえると主張し、“在”は「進行」の意味を示す」と述べ、さらに、命題論理と述語論理を運用して解析を行った。

ここでは龚千炎(1995)と青木萌(2013)を参考にし、“是……的”構文の中に現れる“在”を「前置詞」と見なす。「前置詞の“在”は時態成分として「進行」^(注10)の意味を表す(「時態+時制」)という考えをもとに論述を進める。

5.2.1.1 「第一過程」における分析

この段階では、“是”と“的”を含まない事件文である。

(125)a. 可见，戏曲里的行当在不断变化，发展。

ここで、(125a)の文に第一過程「格役割演算」を論理式で示すと次の(125a')になる。

カワリ ～ガ イタル ～ガ ～二

(125)a'. 在' [行当, 那儿, 变化' (行当) & 到' {变化' (行当), 发展' (行当)}
 シテイルトコロ ～ガ ソコデ ～コトヲ

この論理式は「役割が、そこで(空集合 ϕ)、役割が変わり、かつ、役割が変わることが役割に発展することにいたることをしているところだ。」と読む。

(125a)の文の中国語の意味は「役割が絶え間なく変化し、発展しているところだ」である。また、この文において、“行当在变化, 发展”は「格役割成分」を有する文であり、文中の“行当”は「主格」である。この場合は“的”がまだ挿入されていないので、「格役割」はまだ存在していると考えられる。

5.2.1.2 「第二過程」における分析

次に、第二過程「時間点演算」について分析する。この段階では、第一過程「格役割演算」を基に、“着”と「時間点」を加えると以下の(125b)になる。

(125)b. 可见, 戏曲里的行当在不断变化, 发展着。+「時間点」
 (“着” は時態を表す)

そこで、(125b)の文を論理式で示すと次の(125b')のようになる。

スル ～ガ イタル ～ガ ～二 [結果持続] ヲ

(125)b'. 有' [{变化' (行当) & 到' {变化' (行当), 发展' (行当), 着}

先行スル ～ガ ～二 ヒトシイ ～ガ ～二 後行スル ～ガ ～二
 &<' (着, RT)' &=' (RT, 着) &.>' (着, RT)

ヒトシイ ～ガ ～二 後行スル ～ガ ～二 ヒトシイ ～ガ ～二 先行スル ～ガ ～二
 &= (RT, ST) &>' (ST, 在) &= ' (在, ST) &<' (ST, 在)

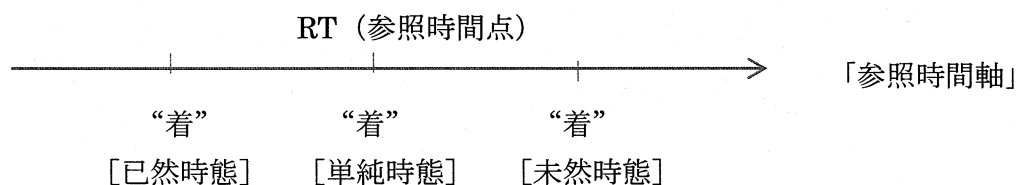
この論理式は「役割が変化し、かつ、役割が変化することが役割に発展することにいたることが[結果持続]をする、かつ、“着”がRTに先行する、かつ、RT(参照時間点)が“着”に等しい、かつ、“着”がRTに後行する、(この段階は時態“着”の演算である)かつ、RTがST(発話時間点)と等しい、かつ、STが“在”に後行する、かつ、“在”がSTに等しい、かつ、STが“在”に先行する(この段階は「時態+時制」“在”の演算である)」と読む。

(125b)の文を中国語の意味に従って考察すると「このことから、役割が絶え間なく

変化して、発展している。」である。また、“行当在不断变化, 发展着。”という文では、“发展”と“变化”に“着”を加えると「時態」をきめることができ、時態が決まると「参照時間点」(RT)も決められ、また文頭にある“可见”によって「発話時間点」(ST)が決められる。この場合の“着”は「……し続ける」の「結果持続」という意味を示す。さらに、副詞の“在”も“着”と同時に共起するので、“在”は発話時間軸の三点、つまり、「過去」、「現在」、「未来」に置かれ「……しているところだ」の意味を表している。(“在”:[時態]+[時制])

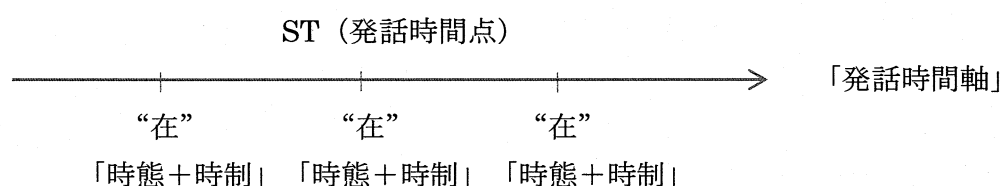
この二つの成分が「時間点演算」の過程に生じることを明らかにするために、ここでは“着”と“在”の時間軸における位置についてそれぞれを〈図 5-1〉と〈図 5-2〉のように示す。

- ・時態“着”：“<’ (着, RT) &=’ (RT, 着) &>’ (着, RT)”は以下のように表す。



〈図 5-1：参照時間軸における時態成分“着”について〉

- ・「時態+時制」“在”：“>’ (ST, 在) &=’ (在, ST) &>’ (ST, 在)”は以下のように表す。



〈図 5-2：発話時間軸における「時態+時制」成分“在”について〉

まず、〈図 5-1〉の「参照時間軸」を見ると、“着”は RT(参照時間点)の前にあり、“着”は RT(参照時間点)と同時にあり、“着”は RT(参照時間点)より後にある。この三つの状態を表す。つまり、“着”は「已然」における[持続]、[単純]における[持続]、そして、[未然]における[持続]である。

また、〈図 5-2〉は「発話時間軸」において、“在”は ST(発話時間点)より前にあり、“在”は ST(発話時間点)と同時にあり、“在”は ST(発話時間点)より後にある。この三

つの状態を表す。つまり、“在”は「過去」における[進行]、[現在]における[進行]、そして、[未来]における[進行]である。これは「時制」ではなく、「時態」というように記述している。しかし、これだけでは不十分で、さらに補足する必要があると考え、ここでは、「時態+時制」の標識であると考ええる。

以上、「時間点演算」を用いて二種類の時間軸における各時間点について説明した。

5.2.1.3 「第三過程」における分析

第三過程「様相演算」について分析する。この段階では、第二過程「時間点演算」を基に、様相(断定)を表す成分“的”を加えると以下の(125c)になる。

(125)c. 可见，戏曲里的行当在不断变化，发展着的。

ここで、(125c)の文を論理式で示すと次の(125c')ようになる。

アル ～ニ ～ガ カツ アル ～ガ [断定] デ

(125)c'. 有' (在, [様相]) & 有' ([様相], 的)

この論理式は「“在”に論理形式(集合)の「様相」がある、かつ、[様相]の要素が“的”[断定]である。」と読む。

(125c)では、“行当在不断变化，发展着”という文に“的”を挿入すると“行当在不断变化，发展着的”になる。“的”を挿入することにより格役割が消失し、「断定(様相)」の意味を追加することになる。さらに、“着”は未然時態を表すので、“是……的”構文において省略することはできない。

5.2.1.4 「第四過程」における分析

第四過程「焦点演算」について分析する。この段階では、第三過程「様相演算」の基に、焦点標識の“是”を加えると、以下の(125d)になる。

(125)d. 可见，戏曲里的行当是在不断变化，发展着的。

そこで、(125d)の文を論理式で示すと次の(125d')ようになる。さらに、「断定」には論理形式(集合)の「焦点」があり、[焦点]の要素が“在”である。

アル ～ニ ～ガ カツ アル ～ガ ～デ
 (125)d'. 有' (的, [焦点]) &有' ([焦点], 在)

この論理式は「“的”に論理形式の[焦点]がある、かつ、[焦点]が“在”(しているところ)である」と読む。この文では、焦点は“是”の直後にある“在”である。

5.2.1.5 各演算の全体の論理式

これまで述べた時態成分“着”の“是……的”構文における成立過程を基に、(125)の全体の論理式を示すと(125')になる。

カワリ ～ガ
 (125)'. 在' [行当, 那儿, 变化' (行当) &到' {变化' (行当), 发展' (行当)}]
 シテイルトコロ ～ガ ソコデ

スル ～ガ [結果持続] ヲ
 &有' [{变化' (行当) &到' {变化' (行当), 发展' (行当), 着}

先行スル ～ガ ～ニ ヒトシイ ～ガ ～ニ 後行スル ～ガ ～ニ ヒトシイ ～ガ ～ニ
 &<' (着, RT)' &=' (RT, 着) & >' (着, RT) & =' (RT, ST)

後行スル ～ガ ～ニ ヒトシイ ～ガ ～ニ 先行スル ～ガ ～ニ
 &>' (ST, 在) & =' (在, ST) &<' (ST, 在)

アル ～ニ ～ガ アル ～ガ [断定] デ アル ～ニ ～ガ アル ～ガ ～デ
 &有' (在, [様相]) &有' ([様相], 的) &有' (的, [焦点]) &有' ([焦点], 在)

この論理式は「役割が、そこで(空集合 ϕ)、役割が変わり、かつ、役割が変わることが役割に発展することにある、かつ、役割が変化し、役割が変化することが発展することにあることが[結果持続]をする、かつ、“着”がRT(参照時間点)に先行する、かつ、RTが“着”に等しい、かつ、“着”がRTに後行する、(この段階は時態“着”の演算である)、かつ、RTがSTと等しい、かつ、ST(発話時間点)が“在”に後行する、かつ、“在”がSTに等しい、かつ、STが“在”に先行する(この段階は「時態+時制」“在”の演算である)、かつ、“在”に論理形式(集合)の「様相」がある、かつ、[様相]の要素が“的”[断定]である。かつ、“的”に論理形式の[焦点]がある、かつ、[焦点]の要素が“在”(しているところ)である。」と読む。

この論理式は四つの演算過程によって構成される。

まず、「役割が、そこで(空集合 ϕ)、役割が変わり、かつ、役割が変わることが役割に発展することにいたる。」という部分は「格役割演算」を表す式である。

次に、「役割が変化し、役割が変化することが役割が発展することにいたることが[結果持続]をする、かつ“着”がRTに先行する、かつ、RTが“着”に等しい、かつ、“着”がRTに後行する、かつ、RTがSTと等しい、かつ、STが“在”に後行する、かつ、“在”がSTに等しい、かつ、STが“在”に先行する」という部分は「時間点演算」を表す式である。この過程の中には「時態“着”の演算」及び「時制“在”の演算」がある。

さらに、「“在”に「様相」がある、かつ、[様相]の要素が“的”[断定]である。」という部分は「様相演算」を表す式である。最後に、「“的”に[焦点]がある、かつ、[焦点]が“在”(しているところ)である。」という部分は「焦点演算」を表す式である。

上述のことから、(125)の文の中では、“在”には三つの機能がある。第一は函数であり、第二は時制を表す、さらに、第三は焦点である。“着”は「結果の持続」という意味を示す。また、[根拠1]の“着”は参照時間点における「已然時態」、「単純時態」、「未然時態」の各時間点におくことができる。従って、[仮説1]は成立することが分かる。

5.2.2 「時態+時制」の“在”と共起しない“着”の論理分析

次に、「時態+時制」を表す成分“在(進行)”が現れない場合において、時態成分の“着”の論理的役割と意味について検討する。

一般的に“着”は「持続」の意味を表す。龔千炎(1995)によると「“着”は「動作の持続」、「行為の持続」、「心理活動の持続」、「姿勢の持続」、「静態の持続」、「心理状態の持続」、「状態の持続」の七つに分類し、“着”「已然時態」と「未然時態」を持つ」と述べる。しかし、ここでは龔千炎(1995)の考えと異なり、新たな観点から仮説を立てた。

[仮説2] 時態を表す成分の“着”は「結果の持続」であり、時間軸上における「已然時態」、「単純時態」である。

この仮説を立てる理由は“是……的”構文の中で、“的”が「断定」と「様相」の意味を表すが、“着”も“了”と同じ機能を持つことがあるからである。“了”は「動作の完了」の意味を表すが、“着”は動作が完了したかどうか不明である。文脈によって「未然時態」の持続が存在しないことがある。

5.2.2.1 「持続時態」成分：“照着”の論理分析

まず、“着”が[持続時態]を表すことの[根拠 2] 及び [根拠 3] となる用例(126)、(127)について述べる。

(126) A : 你说的这是白小还是阿 Q 阿?

B : 你没发现白小性格跟阿 Q 有点儿像吗?

A : 这倒也是。我估摸鲁迅先生就是照着白小才写出来的阿 Q!

(テレビドラマ『小房东』第 70 話)

(青木萌 2017 : 28)

(A : 君が言ったのは白小についてなの、それとも阿 Q についてなの?)

(B : 君は、白小の性格は阿 Q と似ていることを見つけてないの?)

(A : 確かにそうだね、)

私が思うのは、鲁迅先生は白小を参照にしがら《阿 Q 正传》を書き上げたのだ。)

(126)の文の中で下線部にある“我估摸鲁迅先生就是照着白小才写出来的阿 Q!” (私が思うのは、鲁迅先生は白小を参照にしがら《阿 Q 正传》を書き上げたのだ。)を分析対象とする。また、文中の“着”は「～し続ける」の意の「動作の結果の持続」である。本論では“是……的”構文の中に時態を表す成分の“着”が存在している。この場合の“着”は「已然時態」と「単純時態」のみを表す。

5.2.2.1.1 「第一過程」における分析

まず、第一過程「格役割演算」について分析する。この段階では、“是”と“的”が存在しない文であり、それは、(126a)である。

(126)a. 我估摸鲁迅先生就照着白小才写出阿 Q!

そこで、(126a)の文を論理式で示すと次の(126a')のようになる。

参照スル ~ガ ~ヲ イタル ~ガ 書ク ~ニ
(126)a'. 照' (鲁迅先生, 白小) & 到' {照' (鲁迅先生, 白小), 写' (鲁迅先生, 阿 Q)}

スル ~コトガ [動作結果の持続]
& 有' [到' {照' (鲁迅先生, 白小), 写' (鲁迅先生, 阿 Q)}, 着]

この論理式は「鲁迅先生が白小を参照する、かつ、鲁迅先生が白小を参照することが鲁迅先生が《阿 Q 正传》を書くことにいたる、かつ、鲁迅先生が白小を参照することが鲁迅先生が阿 Q を書くことにいたることが持続している。」と読む。

(126a)の文の中国語の意味は「魯迅先生は白小を参照にしながら《阿Q正傳》を書き上げている」である。また、文中の“魯迅先生”は「主格」であり、“阿Q”は「対象物」である。この場合は“的”がまだ挿入されていないので、「格役割」の演算は終了せず、「格役割」はまだ存在している。

5.2.2.1.2 「第二過程」における分析

次に、第二過程「時間点演算」について分析する。この段階では、第一過程「格役割演算」を基に、“着”と「時間点」を加えると以下の(126b)になる。

(126)b. 我估摸魯迅先生就照着白小才写出阿Q! + 「時間点」 (“着”は時態を表す)

そこで、(126b)の文を論理式で示すと次の(126b)’のようになる。

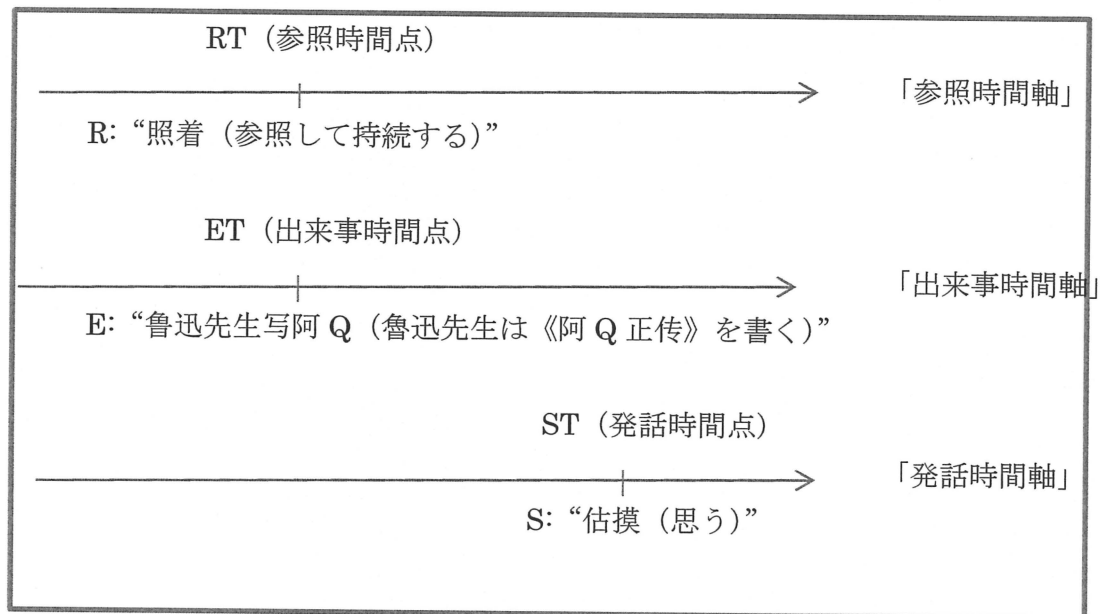
先行スル ～ガ ～ニ ヒトシイ ～ガ ～ト 先行スル ～ガ ～ニ アル ～ニ ～ガ

(126)b’. <’ (着, ET) &=’ (ET, RT) &<’ (RT, ST) &有’ (ST, 的)

この論理式は「“着”がET(出来事時間点)に先行スル、かつ、ETがRT(参照時間点)と等しい、かつ、RTがST(発話時間点)より先行する、かつ、STに“的”がある。」と読む。

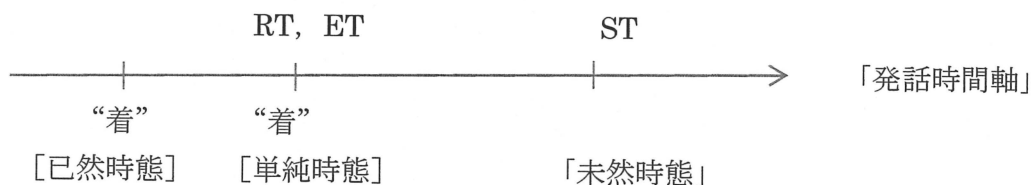
(126b)の文の意味は「私が思うに、魯迅先生は白小を参照しながら《阿Q正傳》を書きあげた」である。また、“我估摸魯迅先生照白小才写阿Q。”という文では、“照”に“着”を加えると「時態」をきめることができ、時態が決まると「参照時間点」(RT)も決められ、また文頭にある“估摸”によって「発話時間点」(ST)が決められる。“魯迅先生写阿Q”は出来事時間点(ET)であり、“照着”は参照時間点(RT)である。

さらに、各時間点を明らかにするために、ここでは時間軸における「参照時間点(RT)」、「出来事時間点(ET)」、「発話時間点(ST)」及び“着”の位置についてそれぞれを〈図5-3〉で表す。



〈図 5-3：“我估摸鲁迅先生就照着白小才写出阿 Q！”の各時間軸〉

・時態“着”は以下の〈図 5-4〉のように表す。



〈図 5-4：発話時間軸における“着”〉

この図の「各時間軸」から見ると、“着”は RT(参照時間点)前にあり、“着”は ET(出来事時間点)と同時にあり、“着”は ST(発話時間点)より前にある。つまり、“着”は「已然時態」における[持続]、[単純時態]における[持続]である。

ここでは“着”は「未然」における「持続」を表わさない。その理由は発話するとき、《阿 Q 正传》は既に関き終わっており、“照着(参照している)”という「動作の持続」は「未然」には存在しないと考えられる。また、この文の中に“在”が文中に含まれていないので、「発話時間軸」の角度から見ると動作は既に終了している。

5.2.2.1.3 「第三過程」における分析

第三過程「様相演算」について分析する。この段階では、第二過程「時間点演算」を基に、様相(断定)を表す成分“的”を加えると以下の(126c)になる。

(126)c 我估摸鲁迅先生照着白小才写出来的阿 Q 的。

ここで、(126c)の文を論理式で示すと次の(126c')のようになる。

アラワス ～ハ ～トイウ論理形式の集合ヲ

(126)c'. 有' (的, [様相]) & 有' ([様相], [断定])

エラブ ソノ集合ガ 要素 [断定] ヲ

この論理式は「“的”は「様相」という論理形式の集合を表す、かつ、その集合が要素 [断定] を選ぶ。」と読む。

(126c)の文の中国語の意味は「私が思うに、魯迅先生は白小を参照しながら《阿 Q 正伝》を書き上げたのだ」であり、“我估摸鲁迅先生就是照着白小才写出来的阿 Q”という文に“的”を挿入することにより[格役割]が消失し、断定(様相)の意味を追加することとなる。

5.2.2.1.4 「第四過程」における分析

第四過程「焦点演算」について分析する。この段階では、第三過程「様相演算」を基に、焦点標識の“是”を加えると以下の(126d)になる。

(126)d. 我估摸鲁迅先生就是照着白小才写出来的阿 Q 的。

そこで、(126d)の文を論理式で示すと次の(126d')のようになる。さらに、「断定」とすると「焦点」が“照”になる。

アル ～ニ ～ガ カツ アル ～ガ ～デ

(126)d'. 有' (断定, [焦点]) & 有' ([焦点], 照)

この論理式は「断定に [焦点] がある、かつ、[焦点] が“照”である」と読む。

(126d)では、“我估摸鲁迅先生照着白小才写出来的阿 Q”という文に焦点標識の“是”を挿入することにより焦点が決められるので、焦点は“是”の直後にある“照”である。

5.2.2.1.5 各演算の全体の論理式

これまで述べた時態成分“着”の“是……的”構文における成立過程を基に、(126)の全体の論理式を示すと(126')になる。

(126)'

参照スル ~ガ ~ヲ イタル ~ガ 書ク ~ニ
照' (鲁迅先生, 白小) & 到' {照' (鲁迅先生, 白小), 写' (鲁迅先生, 阿 Q)}

スル ~コトガ [動作結果の持続]
& 有' [到' {照' (鲁迅先生, 白小), 写' (鲁迅先生, 阿 Q)}, 着]

先行スル ~ガ ~ニ ヒトシイ ~ガ ~ト 先行スル ~ガ ~ニ アル ~ニ ~ガ
& <' (着, ET) & = ' (ET, RT) & <' (RT, ST) & 有' (ST, 的)

アラワス ~ハ ~トイウ論理形式の集合ヲ
& 有' (的, [様相]) & 有' ([様相], [断定])
エラブ ソノ集合ガ 要素 [断定] ヲ

アル ~ニ ~ガ カツ アル ~ガ ~デ
& 有' (断定, [焦点]) & 有' ([焦点], 照)

この論理式は「鲁迅先生が白小を参照する、かつ、鲁迅先生が白小を参照することが鲁迅先生が《阿 Q 正伝》を書くことにいたる、かつ、鲁迅先生が白小を参照することが鲁迅先生が阿 Q を書くことにいたることが持続している、かつ、“着” が ET(出来事時間点)に先行スル、かつ、ET が RT(参照時間点)と等しい、かつ、RT が ST(発話時間点)より先行する、かつ、ST に“的”がある、かつ、“的”は[様相]という論理形式の集合を表す、かつ、その集合が要素 [断定] を選ぶ、かつ、断定に [焦点] がある、かつ、[焦点] が“照”である」と読む。

この論理式は四つの演算過程によって構成される。

まず、「鲁迅先生が白小を参照する、かつ、鲁迅先生が白小を参照することが鲁迅先生が《阿 Q 正伝》を書くことにいたる、かつ、鲁迅先生が白小を参照することが鲁迅先生が阿 Q を書くことにいたることが持続している」という部分は「格役割演算」を表す式である。

次に、“着” が ET(出来事時間点)に先行スル、かつ、ET が RT(参照時間点)と等しい、かつ、RT が ST(発話時間点)より先行する、かつ、ST に“的”がある」という部分は「時間点演算」を表す式である。

さらに、“的”は[様相]という論理形式の集合を表す、かつ、その集合が要素 [断定] を選ぶ」という部分は「様相演算」を表す式である。最後に、「断定に [焦点] がある、かつ、[焦点] が“照”である。」という部分は「焦点演算」を表す式である。

上述のように、四つの過程を経て(126)の文について論理分析を行った。さらに、以上

の分析を総合して、文中の“的”は「結果の持続」、「断定」の意味を表し、“着”は「発話時間軸」の角度から見ると「已然時態」、「未然時態」を表す。

5.2.2.2 「持続時態」成分：“凑合着”の論理分析

次に、“着”が[持続時態]表すことの[根拠3]となる用例(127)について述べる。

(127) 夏寻的爸爸不喜欢夏寻的妈妈，当初就是凑合着结婚的，当夏寻四岁的时候，他的爸爸终于再也忍受不了这种没有感情的枯燥生活了。有一天，教完夏寻用毛笔写“自强不息”四个字后，就一去不复返了。

(夏寻の父は夏寻の母を好きじゃなかった。かつては妥協して結婚したのだ。

夏寻が四歳になったとき、彼の父はついにこのように感情がない、面白味もない生活に耐え難くなった。ある日、夏寻に筆で、“自强不息”の四文字を教えた後に、家から出た。)

(青木萌 2016 : 45)

(127)の文の中で下線部にある“当初就是凑合着结婚的！”(かつては妥協して結婚したのだ。)を分析対象とする。また、文中の“着”は「心理活動の結果の持続」の意味である。この場合の“着”は「～し続ける」の意である。それは“凑合”が「心理状態動詞」であるからである。この分析が妥当であることを証明するために、ここでは龔千炎(1995)と松村文芳(2017)の観点を参考に、検討する。

龔千炎(1995 : 16)は大筋では「心理活動動詞の多くは“了”、“过”は伴うことができるが、“在/正在/着”を伴うことができない。」と述べるが、一部の心理状態動詞は“着”を伴うこともあり、それらの心理状態動詞は“爱着(愛し続ける)”、“相信着(信じている)”、“怀念着(懐かしくしている)”などがあると補足説明した。また、「“心态动词总是表示某种比较长久的或者永恒的感情，感觉，认知等”(心理状態動詞は常にある種比較的に長い、或いは永久の感情、感覚、認知などを表している)」という記述もある。

この記述によれば、文中にある“当初(結婚するとき)”と“当夏寻四岁的时候(娘さんが四歳になったとき)”の間に比較的長い時間に“凑合(妥協する)”という心理活動の結果が持続していると考えられる。さらに、「彼の父はついにこのように感情がない、面白味もない生活に耐え難くなった」という文脈から、この“凑合”という心理状態の結果は持続していると判断できる。

また、松村文芳(2017 : 34)の観点を参考に考えると、“凑合”という心理状態動詞が“夏寻的爸爸”という「心理活動主」と“夏寻的妈妈”という「心理活動の構成物」との結びつきを表していると分析することができる。

5.2.2.2.1 「第一過程」における分析

まず、第一過程「格役割演算」について分析する。この段階では、“是”と“的”

が存在しない文であり、それは、(127a)である。

(127)a. 当初湊合着结婚。

そこで、(127a)の文を論理式で示すと次の(127a')ようになる。

結婚スル ～ガ モツ ～ガ 妥当ドイウ心理状態ヲ
(127)a'. 结婚' (φ) & 有' {结婚' (φ), 湊合} & 有' {有' {结婚' (φ), 湊合}, 着}
アル ～ガ [心理状態結果ノ持続]

この論理式は「誰かが結婚する、かつ、誰かが結婚することが妥協という心理状態を持つ、かつ、誰かが結婚することが妥協という心理状態を持つことが持続している。」と読む。

(127a)の文の意味は「(夏尋の父が) かつては妥協して結婚した」である。この文は、“湊合”という[心理状態動詞]が“夏寻的爸爸”という[心理状態主]と“结婚”という[結婚する]という[心理状態]の[心理状態構成物]を結びつけている。

また、この文において、“当初湊合结婚”は「格役割成分」を有する文であり、文中の“当初”は「時間格」(ある出来事が起きる時間を表す役割(フィルモア 1975 : 245))であり、“婚”は「目標格」(対象物の移動における終点、及び状態変化や形状変化における最終的な状態、結果を表す役割(フィルモア 1975 : 245))であると考え、この場合は“的”が挿入されていないので、「格役割」の演算は終了せず、まだ存在している。

5.2.2.2.2 「第二過程」における分析

次に、第二過程「時間点演算」について分析する。この段階では、第一過程「格役割演算」を基に、「時間点」を加えると以下の(127b)になる。

(127)b. 当初湊合着结婚+「時間点」(“着”は時態を表す)

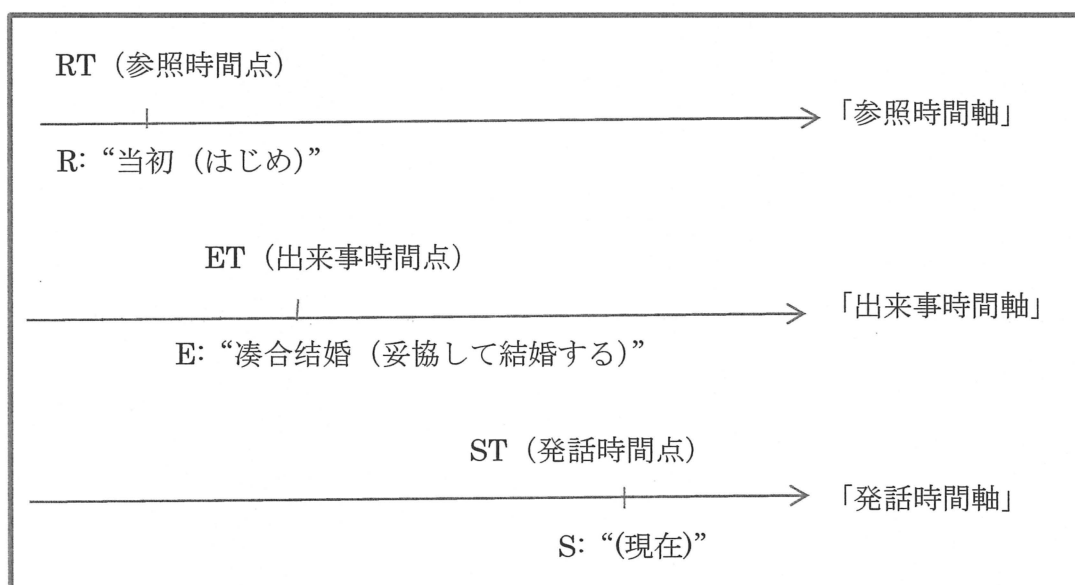
そこで、(127b)の文を論理式で示すと次の(127b')ようになる。

先行スル ～ガ ～ニ 先行スル ～ガ ～ニ 先行スル ～ガ ～ニ モツ ～ガ ～ニ
(127)b'. <' (着, RT) & <' (RT, ET) & <' (ET, ST) & 有' (ST, 的)

この論理式は「心理状態結果の持続」の意味を示す“着”が RT(参照時間点)より先行する、かつ、RT が ET(出来事時間点)より先行する、かつ、ET が ST(発話時間点)より先行する、かつ、ST が“的”を持つ。」と読む。

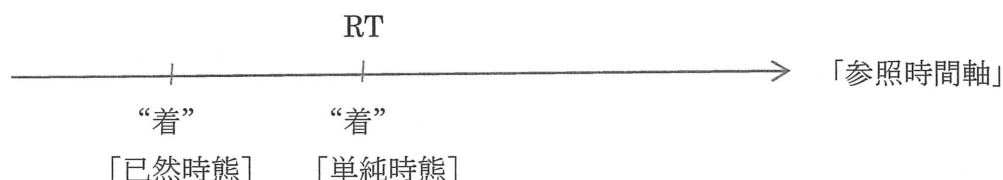
(127b)の文の意味は「はじめは妥協して結婚している」である。また、“当初凑合着结婚!”という文では、“凑合”に“着”を加えると「時態」をきめることができ、時態が決まると「参照時間点」(RT) も決められる。“结婚”は出来事時間(E)であり、“当初凑合着”は参照時間(R)である。

さらに、各時間点を明らかにするために、ここでは時間軸における「参照時間点(RT)」、「出来事時間点(ET)」、「発話時間点(ST)」及び“着”の位置についてそれぞれを〈図 5-5〉で示す。



〈図 5-5 : “当初凑合着结婚” の各時間軸〉

・時態“着”は以下〈図 5-6〉のように表す。



〈図 5-6 : 参照時間軸における“着”①〉

〈図 5-5〉から〈図 5-6〉の「各時間軸」から見ると、“着”は RT (参照時間点) の

前にあり、“着”はET（出来事時間点）と同時にあり、“着”はST（発話時間点）より前にある。つまり、“着”は「已然時態」における〔持続〕、〔単純時態〕における〔持続〕である。

ここでは、“着”は「未然」における〔持続〕ということを考えていない。その理由は発話するとき、夏寻的爸爸”という「心理活動主」と“夏寻的妈妈”という「心理活動の構成物」は既に離婚した〔動作の完了〕ために、“湊合(妥協している)”という「心理状態」はすでに存在しないと考えられるからである。

5.2.2.2.3 「第三過程」における分析

第三過程「様相演算」について分析する。この段階では、第二過程「時間点演算」を基に、様相(断定)を表す成分“的”を加えると以下の(127c)になる。

(127)c. 当初湊合着结的婚。

ここで、(127c)の文を論理式で示すと次の(127c')のようになる。

アラワス ～ガ ～トイウ論理形式の集合ヲ

(127)c'. 有' (的, [様相]) & 有' ([様相], [断定])

エラブ ソノ集合ガ 要素 [断定] ヲ

この論理式は“「的」が「様相」という論理形式の集合を表す、かつ、その集合が要素の〔断定〕を選ぶ。”と読む。

(127c)の文の意味は「かつては妥協して結婚したのだ」であり、“当初湊合着结婚!”という文に“的”を挿入することにより[格役割]が消失し、断定(様相)の意味を追加することとなる。ここでは“的”は[断定]の意を表す。

5.2.2.2.4 「第四過程」における分析

最後に、第四過程「焦点演算」について分析する。この段階では、第三過程「様相演算」を基に、焦点標識の“是”を加えると以下の(127d)になる。

(127)d. 当初是湊合着结的婚。

そこで、(127d)の文を論理式で示すと次の(127d')のようになる。

アル ～ニ ～ガ カツ アル ～ガ ～デ

(127)d'. 有' (断定, [焦点]) & 有' ([焦点], 湊合)

この論理式は「“的”に〔焦点〕がある、かつ、〔焦点〕が“湊合”である」と読む。

(127d)では、“当初是湊合着结婚”という文に焦点標識の“是”を挿入することにより焦点が決められるので、焦点は“是”の直後にある“湊合”である。

5.2.2.2.5 各演算の全体の論理式

これまで述べた時態成分“着”の“是……的”構文における成立過程を基に、(127)の全体の論理式を示すと(127')になる。

結婚スル ～ガ モツ ～ガ 妥当ドイウ心理状態ヲ
 (127)' 结婚' (φ) &有' {结婚' (φ), 湊合} &有' {有' {结婚' (φ), 湊合}, 着}
 アル ～ガ [心理状態結果ノ持続]

先行スル ～ガ ～ニ 先行スル ～ガ ～ニ 先行スル ～ガ ～ニ モツ ～ガ ～ニ
 &<' (着, RT) &<' (RT, ET) &<' (ET, ST) &有' (ST, 的)

アラワス ～ガ ～トイウ論理形式の集合ヲ
 &有' (的, [様相]) &有' ([様相], [断定])
 エラブ ソノ集合ガ 要素 [断定] ヲ

アル ～ニ ～ガ カツ アル ～ガ ～デ
 &有' (断定, [焦点]) &有' ([焦点], 湊合)

この論理式は「誰かが結婚する、かつ、誰かが結婚することが妥協という心理状態を持つ、かつ、誰かが結婚することが妥協という心理状態を持つことが持続している。、かつ、「心理状態結果の持続」の意味を示す“着”がRT(参照時間点)より先行する、かつ、RTがET(出来事時間点)より先行する、かつ、ETがST(発話時間点)より先行する、かつ、STが“的”を持つ、かつ、“的”が「様相」という論理形式の集合を表す、かつ、その集合が要素の〔断定〕を選ぶ、かつ、“的”に〔焦点〕がある、かつ、〔焦点〕が“湊合”である」と読む。

この論理式は四つの演算過程によって構成される。

まず、「誰かが結婚する、かつ、誰かが結婚することが妥協という心理状態を持つ、かつ、誰かが結婚することが妥協という心理状態を持つことが持続している。」という部分は「格役割演算」を表す式である。

次に、「心理状態結果の持続」の意味を示す“着”がRT(参照時間点)より先行する、かつ、RTがET(出来事時間点)より先行する、かつ、ETがST(発話時間点)より先行する、かつ、STが“的”を持つ。」という部分は「時間点演算」を表す式である。

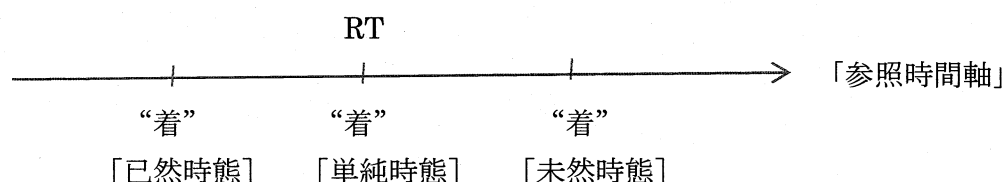
さらに、「“的”は「様相」という論理形式の集合を表す、かつ、その集合が要素[断定]を選ぶ」という部分は「様相演算」を表す式である。最後に、「断定に[焦点]がある、かつ、[焦点]が“湊合”である。」という部分は「焦点演算」を表す式である。

上述、四つの過程を経て(127)の文について論理分析を行った。以上の分析を総合すると、“的”は「心理状態結果の持続」、「断定」の意味を表し、“着”は「参照時間軸」から見ると「已然時態」、「単純時態」を表す。従って、[根拠 2]と[根拠 3]を通じて、[仮説 2]が成立する。

しかし、[根拠]とした(127)の例文は、まだ検討する余地がある。

それは、(127)の文において前後の文脈を考えず、ただ“当初は湊合着结婚”という文だけを分析した。しかし、“着”は「参照時間軸」の角度から見ると「已然時態」における持続、「単純時態」における持続、「未然時態」における持続と考えられる。

その理由は、“结婚”と“结了婚”は同じ意味であり、“结婚”という動作は既に完了しているが、“湊合”という心理活動状態はまだ持続しているからである。従って、この場合においては、時態の“着”は以下の〈図 5-7〉のように表すことができる。



〈図 5-7：参照時間軸における“着”②〉

5.3 本章のまとめ

本章では、時態成分“着”が“是……的”構文と共起する場合の論理構造と意味の分析を試みた。「時態+時制」成分の“在”と共起するとき、時態成分の“着”が「未然時態」、「単純時態」、「未然時態」を表すようになる。このことによって「進行・持続時態」における[仮説 1]を証明した。

また、“在”は発話時間軸上で「過去」における[進行]、[現在]における[進行]、そして、[未来]における[進行]を表しうるので、参照時間軸上の時態成分“着”と共起すると文の意味が複雑化する。ここでは、「時態+時制」の標識であると考え。このことから、時態と時制の間に深い関連性があると判断される。一方、時態成分の“着”が文中に用いられると参照時間軸において「已然時態」、「単純時態」を表すことが証明してきた。

第6章 時態成分“过”が共起する場合の意味と論理分析

6.0 はじめに

本章では、時態成分“过”が“是……的”構文と共起する場合の意味と論理構造について述べる。ここでは、主として张晓玲(1986)、龚千炎(1995)と杉村博文(1994)の研究に基づき時態について説明し、本論における時態成分“过”の意味と論理式について述べる。

6.1 時態成分“过”に関する考察

まず、一般的に「経験時態」を表すとされる“过”の論理的役割と意味について次の仮説を立て、検討する。

[仮説1] 時態を表す成分“过”は「(出来事時間点が)不確定な経験」であり、参照時間軸上における「已然」のいずれかの時期である。

この考えを論証するために、諸研究者の研究を紹介する。主として龚千炎(1995)の研究に基づき中国語の「時間体系」中にある時態について説明し、本論における時態成分“过”の当構文中の意味に対して形式意味論を用いて分析する。ここでも第二章の「格役割演算」、「時間点演算」、「様相演算」、「焦点演算」の四つの過程を考察して、意味と論理を検討する。

6.1.1 张晓玲(1986)の記述

张晓玲(1986)によると助詞の“过”は以下の二種類に分けられる。

〈I〉“过 a”は“表示动作的完成, 结束(動作の完了、終息を表す)”の場合に用いる。

(128) 那五擦过脸, 低头一看。 (张晓玲 1986:48)

(那五は顔をふいた後に、うつむいて見ます。)

(129) 杜宁匆匆吃过早饭, 也上了路。 (张晓玲 1986:48)

(杜宁が急いで朝ご飯を食べた後に出発しました。)

〈II〉“过 b”は“表示动作或状态曾经发生过(動作或いは状態がかつて発生したことを表す)の場合“に用いる。

(130) 我想过, 三番五次地想过这问题。 (张晓玲 1986:48)

(私は何度も、何度もこの問題について考えたことがある。)

(131) 那救人的青年, 曾经卑贱过, 可在死的那一刻升华到了富贵。

(张晓玲 1986:49)

(あの人を救った青年はかつて下賤だったが、亡くなったその時、彼は富貴に昇華された。)

さらに、张晓玲(1986)は“过 a”と“过 b”の相違点について次の〈i〉-〈iii〉のように述べる。

〈i〉 結合能力が異なる。

- ・ “过 a”では形容詞と結び付くことは不可能だが、連合フレーズと結び付くことが可能である(しかし、このような現象は少ない)

(132) 等我研究讨论过再告诉你。(张晓玲 1986:49)

(私が研究議論した後君に教えてあげる。)

- ・ “过 b”は半数以上の形容詞と結び付くことができ、多種のフレーズと結び付くこともできる。

(133) 他从来没有打扮得这么漂亮过。 「動補フレーズ+ “过 b”」

(张晓玲 1986:49)

(彼は今までこんな綺麗にしたことがない)

(134) 谁听说卖进去山里的奴隶跑出一个过。 「動目フレーズ+ “过 b”」

(张晓玲 1986:49)

(いったい誰が山の中に売った奴隷が逃げたことがあると聞いただろうか。)

(135) 我叫她和你，妇联会主任商量过。 「兼語フレーズ+ “过 b”」

(张晓玲 1986:49)

(私が彼女に君と婦女連合会主任とに相談させた。)

(136) 有些人虽然没有戴帽子，但是批评或斗争过他们，伤了感情。

「結合フレーズ+ “过 b”」 (张晓玲 1986:49)

(帽子を被っていないものがいたが、彼らを批判するか争ったことがあって感情を傷つけた。)

〈ii〉 “过 a”は「過去」、「現在」、「未来」の時間の中に使うことができる。

(137) 那天他吃过饭就去找老李了。 “过”：「過去」(张晓玲 1986:49)

(あの日、彼はご飯を食べた後に李さんを探しに行った。)

(138) 他吃过饭就去找老李了。 “过”：「現在」(张晓玲 1986:49)

(彼はご飯を食べた後、すぐに李さんを探しに行く。)

(139) 明天吃过饭就去找老李。 “过”：「未来」(张晓玲 1986:49)

(明日ご飯を食べたらすぐに李さんを探し行く(つもりだ))

- ・ “过 b”は「過去」の時間の中に発生したことだけに用い、使うことができる。

(140) 她曾经生过一个男孩子，但不幸夭折了。 (张晓玲 1986:49)

(彼女はかつて(一人の)男の子を生んだことがあるが、不幸に亡くなった。)

〈iii〉方言の資料の中から、“过 a”と“过 b”の異なるところが見つかる。長沙方言の場合では、“过 a”の発音は [ka] であり、“过 b”の発音は [ko] である。

さらに、厦門方言と莆仙方言では、“过 a”は使う場合が少ないか或いは省略するか、或いは他の方式で動作の完了を表す。

(141) 明天吃过饭到我家里来。 (普通话) (张晓玲 1986:49)

(明日ご飯を食べ終えた後に私の家に来てね。)

(142) 明天吃饱以后来我家。 (厦門話) (张晓玲 1986:50)

(明日お腹がいっぱい食べた後に私の家に来てね。)

(143) 明天吃饭了到我家里。 (莆仙話) (张晓玲 1986:50)

(明日ご飯を食べた後に私の家に来てね。)

さらに、张晓玲(1986)は、“过”と“了”について詳しく分析を行った。それは、「“过”と“了”は同じ機能を持つ」という捉え方、及び「一般的に“过 b”或いは“了”のどちらか一方を省略することができる」(张晓玲 1986: 53)という捉え方である。

しかし、ここでは、この論点に賛成することができない。その理由は、第四章で述べたように時態成分の“了”は参照時間点より前の已然の「完了」の意味を表しているからである。また、本論では、张晓玲(1986)が主張している“过 b”の観点だけを採用し、分析を行う。その理由は、この場合の“过”は「経験」の意味を示しているからである。

6.1.2 龚千炎(1995)の記述

「経験時態(经历时态)」は、動作行為の変化がかつて発生、進行していたことを表すか、状況の状態がかつて存在していたことを示す(龚千炎 1995: 80)。中国語では、この種の時態は主に時態助詞の“过”と時態副詞の“曾经”によって表示する(龚千炎 1995: 80)。“过”と“了1”と同様に、一部分の静態性動詞を除き、各種類の動詞の後ろにつく。“过”の例を挙げると以下のようなになる。

(144) 这一辈子，我可走过不少地方。 过：「動作動詞」に付加 (龚千炎 1995: 80)

(この一生で、私はたくさんの場所に行ったことがある。)

(145) 好像他们一道在部队上当过兵，有多年的情份。 过：「行為動詞」に付加
(龚千炎 1995: 80)

(彼らはまるで一緒に部隊で兵役をしたことがあるように、長年の感情がある。)
(146) 老实说我从来没有想过这个问题。 过：「心理活動動詞」に付加
(龔千炎 1995 : 80)

(正直に言って、私は今までこの問題について考えたことがない。)
(147) 他的病从来没有好转过。 过：「終息点を持つ、変化を表す動詞」に付加
(龔千炎 1995 : 80)

(彼の病気は今まで改善したことがない。)
(148) 五十二岁了，他没有得到过爱情，他没有见过海洋，更谈不上飞翔…
过：「瞬間動詞」に付加 (龔千炎 1995 : 81)
(52 歳になったのに、未だ愛情を得られたことがないし、海を見たことがない。
さらに飛ぶことについては言うまでもない。)

6.1.3 杉村博文(1994)の記述

杉村博文(1994)は“没学过汉语语法(中国語の文法を勉強したことがない)”という例を挙げ、「“过”は『過去の経験』を表す」と主張している(杉村博文 1994:63)。

さらに、杉村博文(1994)は“过”と“了”の問題について(149a-b) (150a-b)のような例を挙げながら「“过”で注意すべき点は「已然」を否定する副詞“没(有)”の否定を受けても脱落しないことである。この点で“没(有)”の否定を受けると落ちてしまう“了”とは大きく異なる。」と指摘した(杉村博文 1994 : 63)。

(149)a. 我喝了一碗小米粥。(私はアワのおかゆを一杯食べた。)

b. 我没有喝小米粥。

(150)a. 我喝过小米粥。(私はアワのおかゆを食べたことがある)

b. 我没有喝过小米粥。

(杉村博文 1994 : 63)

杉村博文(1994)が述べていることから、(149b)で“了”が脱落した場合は、“喝”だけを否定している。つまり、「動作」を否定する。一方、(150b)で“过”が残る場合は出来事全体に対し否定する。つまり、「已然の経験」を否定すると分かる。本論文では、杉村博文(1994)が主張する「“过”は『過去の経験』を表す」という捉え方を基に検討する。

6.1.4 松村文芳(2017)の記述

松村文芳(2017)は時相の角度から「結果補語」の“过”について論じ、意味論の仕組みにある「メタ言語」^(注 11)を用いて、“过”の意味を分析し以下のように記述している。

- (151) 电影已经演过了，你怎么才来？ “过”：[動作の終息]
 (映画はすでに上映し終わってしまった。君はどうして今頃来たの?)
- (152) 他跳过一米七十了。 “过”：[動作の限度超え]
 (彼は1メートル70を飛び越えた。)
- (153) 汽车刚开过他家门口。 “过”：[場所経過(通る)]
 (自動車は彼の家の前を通りすぎたばかりだ。)
- (154) 这个乒乓球队的新手赛过了老将。 “过”：[対象の屈服(まかす)]
 (この卓球チームのルーキーはベテランを打ち負かした。)
- (155) 他拿过碗就去盛饭。 “过”：[動作の対象物の空間移動(移動する)]
 (彼はお碗を持って行ってご飯をよそった。)
- (156) 他回过头对后边的人说了些什么。 “过”：[対象物の方向転換(まわる)]
 (彼は振り向いて後ろの人に何か言った。)
- (157) 忙过这几天就轻松多了。 “过”：[状態や動作の時間の消失(過ぎる)]
 (この数日を忙しく過ごせばうんと楽になるだろう。)
- (158) 他们终于躲过了那场灾难。 “过”：[避難の必要な対象物の通過(通り過ぎる)]
 (彼らはついにその災いを逃れた。)
- (159) 三年前种的树已经高过两层楼了。 “过”：[対象物の有する数量の超過(超える)]
 (三年前に植えた木はすでに二階の高さを超えた。)

(松村文芳 2017: 45)

6.2 “是……的”構文における時態成分“过”の論理分析

ここで、“过”が「已然の不確定な経験」を表すことの根拠となる用例(160)から(161)について述べる。

6.2.1 「経験時態」：“有过”の論理分析

- (160) ……真相一旦暴露，不齿于士林，因而自杀者也是有过的。 (文艺，21 页)
 (杉村博文 1999: 61 / 袁毓林 2003: 12)
 (……真相が一旦暴露されると、皆によって相手にされない、そこで、自殺したものさえいたのだ)

(160)の文の中で下線部にある“自杀者也是有过的(自殺したものさえいたのだ)”を分析対象とする。この文に注目されるのは、“是……的”構文の中に「時態標識」の“过”が共起することである。文中の“过”は「参照時間点」より前の已然の「不確

定な経験」である。すなわち、“过”は「経験時態」を表し、日本語の意味は「……したことがある」である。この例を挙げる理由は、“是”と“的”の間に“过”が存在し、時態を表す成分が省略されないという条件を満たすからである。

6.2.1.1 「第一過程」における分析

まず、第一過程「格役割演算」について分析する。この段階では、“是”と“的”が存在しない文であり、それは、(160a)である。

(160)a. 自杀者有过。

そこで、(160a)の文を論理式で示すと次の(160a')ようになる。

アル ~ガ [経験] デ

(160)a'. 有' (自杀者)&有' {有' (自杀者), 过}

イル ~ガ

この論理式は「自殺者がいる、かつ、自殺者がいることが已然の経験である」と読む。

(160a')の式の中国語の意味は「自殺したものが存在したことがある。」である。また、文中の“自杀者”は「経験者格」である。この場合は“的”がまだ挿入されていないので、「格役割」の演算は終了しない。従って、(160a)の「格役割」はまだ存在している。

6.2.1.2 「第二過程」における分析

次に、第二過程「時間点演算」について分析する。この段階では、第一過程「格役割演算」を基に、「時間点」を加えると以下の(160b)になる。

(160)b. 自杀者有过+「時間点」 (“过”は時態を表す)

そこで、(160b)の文を論理式で示すと次の(160b')ようになる。

アル ~ハ ~デ 先行スル ~ガ ~ニ 先行スル ~ガ ~ニ アリ ~ニ ~ガ

(160)b'. 有' (过, ET) &<' (ET, RT) &<' (RT, ST) &有' (ST, 的)

この論理式は「“过”はET(出来事時間点)である、かつ、ETがRT(参照時間点)に先行する、かつ、RTがST(発話時間点)に先行する、かつ、STに“的”がある。」と読む。

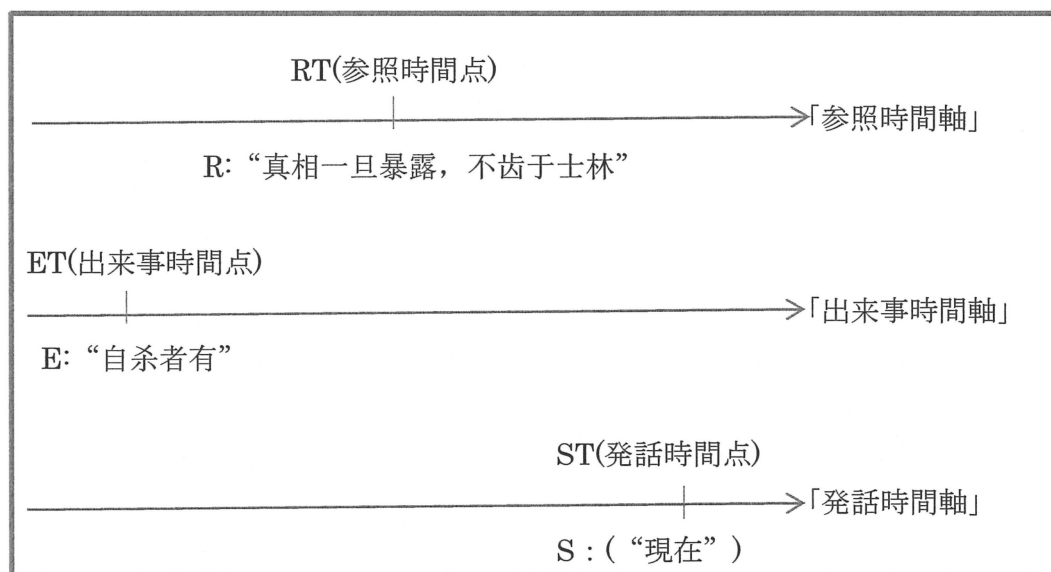
(160b)の文の意味は「自殺したものが存在したことの「時間」がある」である。

“自殺者有”という文は「出来事時間点(ET)」である。また、“过”を加えると「時態」を決めることができ、時態が決まると「参照時間点(RT)」もきめられる。そこで、文頭にある“真相一旦暴露，不齿于士林”は「参照時間点(RT)」であることが分かる。

そして、「発話時間点(ST)」において、「参照時間点(RT)」と「出来事時間点(ET)」が位置指定できる時に“的”が導入される。即ち、「参照時間点(RT)」、「出来事時間点(ET)」にすぐ“的”を導入することはできない(“过”も「断定」できない)。

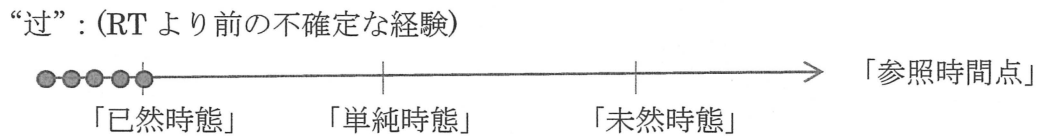
このことから、「発話時間点(ST)」に“的”を導入すると、話したり書いたりする時点で、はじめて「断定」を導入するという意味になる。また、「発話時間点(ST)」の時間が終わってから、「様相」に入ることが分かる。

さらに、各時間点を明らかにするために、ここでは時間軸における「参照時間点(RT)」、「出来事時間点(ET)」、「発話時間点(ST)」の位置についてそれぞれを〈図 6-1〉のように示す。



〈図 6-1 : “自殺者有过” の各時間軸〉

時態“过”は以下の〈図 6-2〉のように表す。



〈図 6-2：参照時間軸における“过”①〉

〈図 6-1〉から“真相一旦暴露，不齿于士林””と“自杀者有”の発生時点は一致しないと分かる。「出来事時間点(ET)」が「参照時間点(RT)」に先行する。即ち、時間軸上において、「出来事時間点(ET)」は「参照時間点(RT)」より左に置かれる。そこで、「出来事時間点(ET)」と「参照時間点(RT)」間の関係を論理式で示すと「<’ (ET, RT)」と表記される。そして、「参照時間点(RT)」と「発話時間点(ST)」を比較すると、「参照時間点(RT)」が「発話時間点(ST)」に先行する。そこで、論理式で表記すると「<’ (RT, ST)」である。

「発話時間点(ST)」では、「参照時間点(RT)」が「発話時間点(ST)」に先行する。即ち、時間軸上において、「発話時間点(ST)」は「参照時間点(RT)」より右に置かれる。そこで、論理式で示すと「<’ (RT, ST)」である。

最後に、〈図 6-2〉では、時態成分の“过”(～したことがある)は「出来事時間点(ET)」であり、参照時間点より前である。すなわち、自殺者は複数いる。その時点でいずれか指定できないため、「不確定な経験」であると考ええる。また、“过”が「参照時間点(RT)」より前に「出来事時間点(ET)」が発生したので、「共起関係」であると考えられる。その理由は「真相が一旦暴露されると、皆によって相手にされなくなる」と「自殺者する人間がいる」が同時に起こるからである。以上、この段階では「時間点演算」を用いて時間軸における各時間点、及び“过”について説明した。

6.2.1.3 「第三過程」における分析

第三過程「様相演算」について分析する。この段階では、第二過程「時間点演算」を基に、様相(断定)を表す成分“的”を加えると以下の(160c)になる。

(160)c. 自杀者有过的。

ここで、(160c)の文を論理式で示すと次の(160c’)ようになる。

アラワス ～ガ ～トイウ論理形式の集合ヲ

(160)c’. 有' (的, [様相]) & 有' ([様相], [断定])

エラブ ソノ集合ガ 要素 [断定] ヲ

この論理式は「“的”が「様相」という論理形式の集合を表す、かつ、その集合が要素〔断定〕を選ぶ。」と読む。

(160c)では、“自杀者有过”という文に“的”を挿入することにより〔格役割〕が消失し、断定(様相)の意味を追加することとなる。この過程では「様相演算」を用い、“的”が「断定」を表すことを説明した。

6.2.1.4 「第四過程」における分析

最後に、第四過程「焦点演算」について分析する。この段階では、第三過程「様相演算」を基に、焦点標識の“是”を加えると以下の(160d)になる。

(160)d. 自杀者是有过的。

そこで、(160d)の文を論理式で示すと次の(160d')のようになる。

トル ~ガ ~トイウ論理形式の集合ヲ

(160)d'. 有' (断定, [焦点]) & 有' ([焦点], 有)

アル ソノ [焦点] ガ ~デ

この論理式は「断定が〔焦点〕という論理形式の集合をとる、かつ、その〔焦点〕が“有”である。」と読む。

(160d)では、“自杀者有过的”という文に焦点標識の“是”を挿入することにより焦点が決められるので、焦点は“是”の直後にある“有”である。「自殺者は存在する」を示す。

6.2.1.5 各演算の全体の論理式

これまで述べた時態成分“过”の“是……的”構文における成立過程を基に、(160)の全体の論理式を示すと(160')になる。

(160) ……真相一旦暴露，不齿于士林，因而自杀者也是有过的。（文艺，21 页）

（……真相が一旦暴露されると、皆によって相手にされない、そこで、自殺した
ものさえいたのだ）（再掲）

アル ～ガ [経験] デ
 (160) ‘有’ (自殺者)&有’ {有’ (自殺者), 过}

イル ～ガ

アル ～ハ ～デ 先行スル ～ガ ～ニ 先行スル ～ガ ～ニ アリ ～ニ ～ガ
 &有’ (过, ET) &<’ (ET, RT) &<’ (RT, ST) &有’ (ST, 的)

アラワス ～ガ ～トイウ論理形式の集合ヲ
 &有’ (的, [様相]) &有’ ’ ([様相], [断定])
 エラブ ソノ集合ガ 要素 [断定] ヲ

トル ～ガ ～トイウ論理形式の集合ヲ
 &有’ (断定, [焦点]) &有’ ([焦点], 有)
 アル ソノ [焦点]ガ ～デ

この論理式は「自殺者がいる、かつ、自殺者がいることが已然の経験である、かつ、“过”はET(出来事時間点)である、かつ、ETがRT(参照時間点)に先行する、かつ、RTがST(発話時間点)に先行する、かつ、STに“的”がある。かつ、“的”が「様相」という論理形式の集合を表す、かつ、その集合が要素[断定]を選ぶ。かつ、断定が[焦点]という論理形式の集合をとる、かつ、その[焦点]が“有”である。」と読む。

この論理式は四つの演算過程によって構成される。

まず、「自殺者がいる、かつ、自殺者がいることが已然の経験である。」という部分は「格役割演算」を表す式である。

次に、「“过”はET(出来事時間点)である、かつ、ETがRT(参照時間点)に先行する、かつ、RTがST(発話時間点)に先行する、かつ、STに“的”がある。」という部分は「時間点演算」を表す式である。

さらに、「“的”が「様相」という論理形式の集合を表す、かつ、その集合が要素[断定]を選ぶ」という部分は「様相演算」を表す式である。最後に、「断定が[焦点]という論理形式の集合をとる、かつ、その[焦点]が“有”である。」という部分は「焦点演算」を表す式である。

上述の四つの過程を経て(160)の文について論理分析を行った。以上の分析を総合する、文中の“的”は…[断定]の意味を表し、“过”は「参照時間点」より前の已然の「不確定な経験」の意味を表すことが分かる。

6.2.2 「経験時態」: “商量过”の論理分析

次も“过”が「経験時態」を表す例を考察する。

(161) 这是我和你妈妈商量过的。你要理会我们的心情。(路遥《平凡的世界》)

(これは私と君の母とで相談したことがあったのだ。君が私たちの気持ちを理解する必要がある。)

この例は(160)と同様に、“是”と“的”の間に已然の「不確定な経験」を意味する“过”が存在している。次に、この文を、形式意味論を用いて考察してみよう。

6.2.2.1 「第一過程」における分析

まず、第一過程「格役割演算」について分析する。この段階では、“是”と“的”が存在しない文であり、それは、(161a)である。

(161)a. 这我和你妈妈商量过。

そこで、(161a)の文を論理式で示すと次の(161a')ようになる。

相談スル ～ガ ～ト アル ～ガ [経験] デ
(161)a'. 商量' (我, 你妈妈)&' {商量' (我, 你妈妈), 过}

この論理式は「私が君の母と相談する、かつ、私が君の母と相談することが経験である」と読む。

(161a)の文の中国語の意味は「私は君の母と相談したことがある」である。また、文中の“我”は「主格」であり、“你妈妈”は「随伴者格」である。この場合は“的”がまだ挿入されていないので、「格役割」の演算は終了しない。従って、(161a)の「格役割」はまだ存在している。

6.2.2.2 「第二過程」における分析

次に、第二過程「時間点演算」について分析する。この段階では、第一過程「格役割演算」を基に、「時間点」を加えると以下の(161b)になる。

(161)b. 这我和你妈妈商量过。+「時間点」 (“过”は時態を表す)

そこで、(161b)の文を論理式で示すと次の(161b')ようになる。

アル ～ハ ～デ 先行スル ～ガ ～ニ 先行スル ～ガ ～ニ アル ～ニ ～ガ

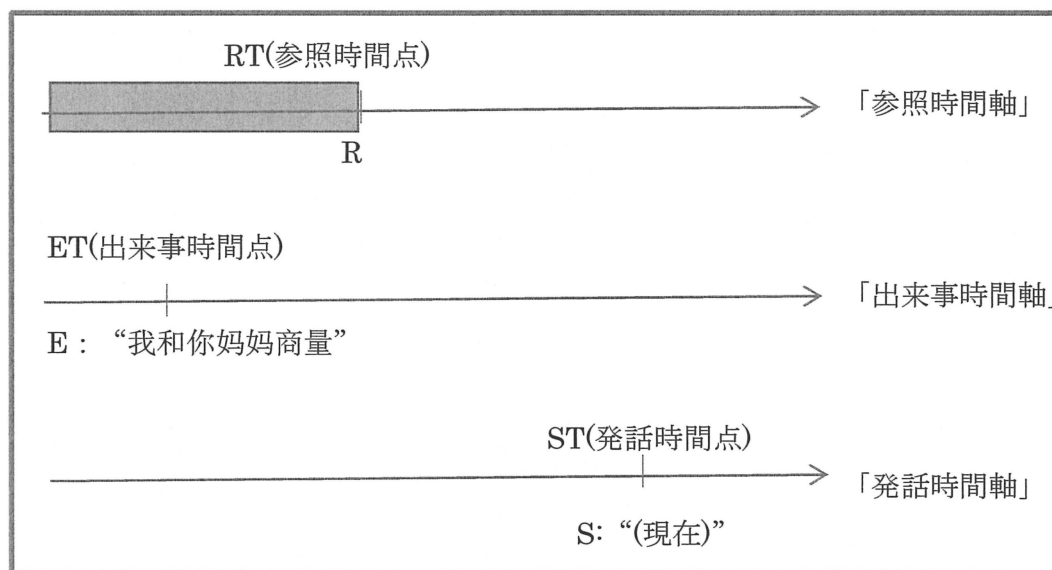
(161)b'. 有' (过, ET) &<' (ET, RT) &<' (RT, ST) &有' (ST, 的)

この論理式は「“过”はET(出来事時間点)である、かつ、ETがRT(参照時間点)に先行する、かつ、RTがST(発話時間点)に先行する、かつ、STに“的”がある。」と読む。

(161b)の式の意味は「私が君の母と相談したことを経験した「時間」がある」である。また、“我和你妈妈商量过”という文では、“商量”に“过”を加えると「時態」を決めることができ、時態が決まると「参照時間点(RT)」も決められる。この場合「私が君の母と相談する」という「出来事時間点(ET)」が「参照時間点(RT)」に先行する。論理式は「<' (ET, RT)」で示す。

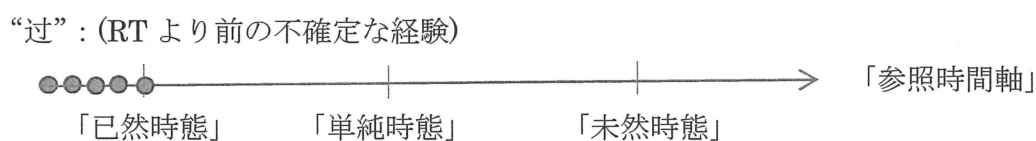
さらに、発話時間点は「現在」であるので、出来事時間軸を基準として「参照時間点」は左にあり、「発話時間点」は右側にある。つまり、この場合の「参照時間点(RT)」が「発話時間点(ST)」に先行する、論理式で示すと「<' (RT, ST)」である。

各時間点を明らかにするために、ここでは各時間軸における「参照時間点(RT)」、「出来事時間点(ET)」、「発話時間点(ST)」の位置について〈図 6-3〉で示す。



〈図 6-3：“我和你妈妈商量过”の各時間軸〉

時態“过”は以下の〈図 6-4〉のように表す。



〈図 6-4：参照時間軸における“过”②〉

〈図 6-3〉から〈図 6-4〉から「私が君の母と相談する」という「出来事時間点(ET)」が「参照時間点(RT)」に先行する。論理式で表すと「<」(ET, RT)」となる。

「発話時間点(ST)」では、「参照時間点(RT)」が「発話時間点(ST)」に先行する。即ち、時間軸上において、「発話時間点(ST)」は「参照時間点(RT)」より右に置かれる。

そこで、論理式で示すと「<」(RT, ST)」である。最後に、時態成分の“过”(～したことがある)は「出来事時間点(ET)」であり、参照時間点より前にある。“我和你妈妈商量”という出来事の発生時点でいずれか指定できないため、「不確定な経験」である。

以上のことから、この段階では「時間点演算」を用いて時間軸における各時間点、及び“过”について説明した。

6.2.2.3 「第三過程」における分析

第三過程「様相演算」について分析する。この段階では、第二過程「時間点演算」を基に、様相(断定)を表す成分“的”を加えると以下の(161c)になる。

(161)c. 这我和你妈妈商量过的。

そこで、(161c)の文を論理式で示すと次の(161c')ようになる。

アラワス ～ガ ～トイウ論理形式の集合ヲ

(161)c'. 有' (的, [様相]) & 有' ([様相], [断定])

エラブ ソノ集合ガ 要素 [断定] ヲ

この論理式は「“的”が「様相」という論理形式の集合を表す、かつ、その集合が要素 [断定] を選ぶ。」と読む。

(161c)では、“我和你妈妈商量过”という文に“的”を挿入することにより[格役割]が消失し、断定(様相)の意味を追加することとなる。この段階は「様相演算」を用い、“的”が「断定」を表すことを説明した。

6.2.2.4 「第四過程」における分析

最後に、第四過程「焦点演算」について分析する。この段階では、第三過程「様相演算」を基に、焦点標識の“是”を加えると以下の(161d)になる。

(161)d. 这是我和你妈妈商量过的。

そこで、(161d)の文を論理式で示すと次の(161d')ようになる。

トル ～ガ ～トイウ論理形式の集合ヲ

(161)d'. 有' (断定, [焦点]) & 有' ([焦点], 我)

アル ソノ[焦点]ガ ～デ

この論理式は「断定が[焦点]という論理形式の集合をとる、かつ、その[焦点]が“我”である。」と読む。

(161d)では、“我和你妈妈商量过的”という文に焦点標識の“是”を文頭に挿入することにより焦点が決められるので、焦点は“是”の直後にある“我”である。それは、「君の母と相談したのは他の人ではなく、私であること。」を示す。

6.2.2.5 各演算の全体の論理式

これまで述べた時態成分“过”の“是……的”構文における成立過程を基に、(161)の全体の論理式を示すと(161')になる。

- (161) 这是我和你妈妈商量过的。你要理会我们的心情。(路遥《平凡的世界》)
 (これは私と君の母とで相談したことがあったのだ。君が私たちの気持ちを理解する必要がある。)(再掲)

相談スル ～ガ ～ト アル ～ガ [経験] デ
 (161)' 商量' (我, 你妈妈)&有' {商量' (我, 你妈妈), 过}

アル ～ハ ～デ 先行スル ～ガ ～ニ 先行スル ～ガ ～ニ アル ～ニ ～ガ
 &有' (过, ET) &<' (ET, RT) &<' (RT, ST) &有' (ST, 的)

アラワス ～ガ ～トイウ論理形式の集合ヲ
 &有' (的, [様相]) &有' ([様相], [断定])
 エラブ ソノ集合ガ 要素[断定]ヲ

トル ～ガ ～トイウ論理形式の集合ヲ
 &有' (断定, [焦点]) &有' ([焦点], 我)
 アル ソノ[焦点]ガ ～デ

この論理式は「私が君の母と相談する、かつ、私が君の母と相談することが経験である、かつ、“过”はET(出来事時間点)である、かつ、ETがRT(参照時間点)に先行する、かつ、RTがST(発話時間点)に先行する、かつ、STに“的”がある。かつ、“的”が[様相]という論理形式の集合を表す、かつ、その集合が要素[断定]を選ぶ。かつ、断定が[焦点]という論理形式の集合をとる、かつ、その[焦点]が“我”である。」と読む。

この論理式は四つの演算過程によって構成される。

まず、「私が君の母と相談する、かつ、私が君の母と相談することが経験である。」という部分は「格役割演算」を表す式である。

次に、“过”はET(出来事時間点)である、かつ、ETがRT(参照時間点)に先行する、かつ、RTがST(発話時間点)に先行する、かつ、STに“的”がある。」という部分は「時間点演算」を表す式である。

さらに、“的”が「様相」という論理形式の集合を表す、かつ、その集合が要素[断定]を選ぶ」という部分は「様相演算」を表す式である。最後に、「断定が[焦点]

上述の四つの過程を経て(161)の文について論理分析を行った。以上の分析を総合すると、文中の“的”は… [断定]の意味を表し、“过”は「参照時間点」より前の已然の「不確定な経験」であることが分かる。

6.2.3 「経験時態」: “吃过”・“看过”の論理分析

(162) 我是吃过猪肉的，也是看过猪跑的。

6.2.3.1 「第一過程」における分析

(162)a. 我吃过猪肉，也看过猪跑。

タベル ～ガ ～ヲ アル ～ガ [経験] 二

連言 見る ～ガ ～ヲ カツ アル ～ガ [経験] ガ

～コトガ

この論理式は「私が豚肉を食べる、かつ、私が豚肉を食べることという「経験」がある。かつ、私は豚が走るのを見る。かつ、私は豚が走ることを見た「経験」がある。」と読む。

(162a)の文の中国語の意味は「私が豚肉を食べたことがあり、豚が走ることを見たこともある。」である。また、文中の“我”は「動作主格」であり、“猪”は「対象格」である。この場合は“的”がまだ挿入されていないので、「格役割」の演算は終了しない。従って、この文の「格役割」はまだ存在している。

6.2.3.2 「第二過程」における分析

次に、第二過程「時間点演算」について分析する。この段階では、第一過程「格役割演算」を基に、「時間点」を加えると以下の(162b)になる。

(162)b. 我吃过猪肉，也看过猪跑。+「時間点」(“过”は時態を表す)

そこで、(162b)の文を論理式で示すと次の(162b)'のようになる。

アル ~ハ ~デ 先行スル ~ガ ~ニ 先行スル ~ガ ~ニ アリ ~ニ ~ガ
(162)b'. 有' (过, ET) &<' (ET, RT) &<' (RT, ST) &有' (ST, 的)

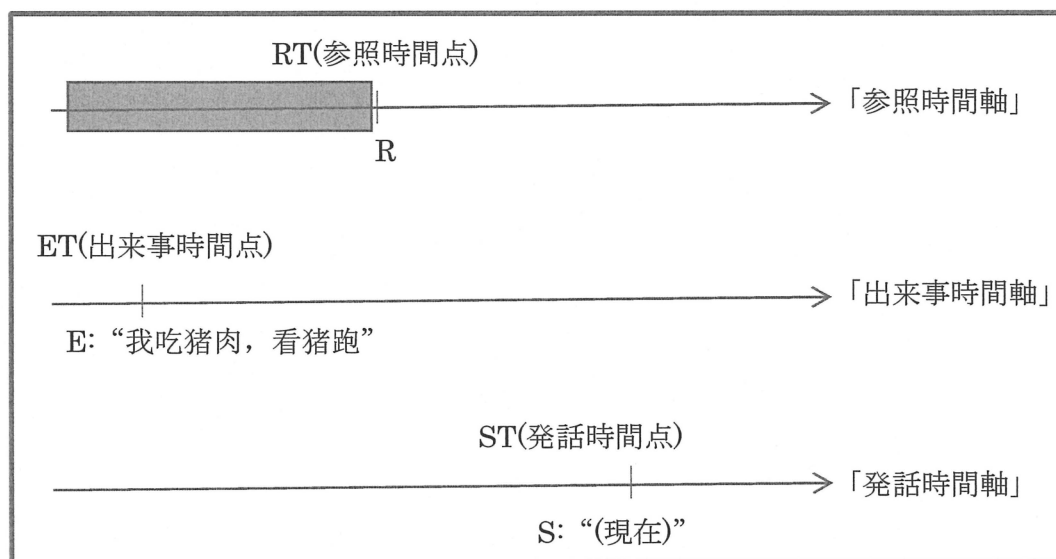
連言 アル ~ハ ~デ 先行スル ~ガ ~ニ 先行スル ~ガ ~ニ アリ ~ニ ~ガ
Λ 有' (过, ET) &<' (ET, RT) &<' (RT, ST) &有' (ST, 的)

この論理式は「“过”(～ことがある)はET(出来事時間点)である、かつ、ETがRT(参照時間点)に先行する、かつ、RTがST(発話時間点)に先行する、かつ、STに“的”がある。連言、“过”(～ことがある)はETである、かつ、ETがRTに先行する。かつ、RTがST(発話時間点)に先行する、かつ、STに“的”がある。」と読む。

(162b)の式の意味は「私が豚肉を食べる、また、豚が走るのを見ることを経験した「時間」がある」である。文中の“吃”と“看”は[持続動詞]であり、“过”を加えることにより「参照時間点(RT)」より前の「已然時態」であることが決まる。

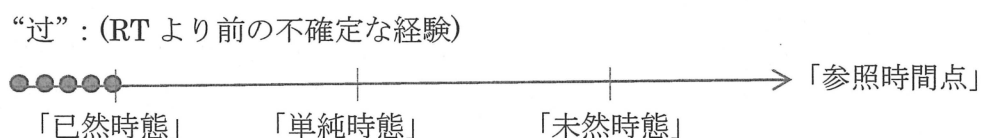
そこで、文頭にある“这辈子”は「参照時間点(RT)」であることが分かる。そして、「発話時間点(ST)」において、「参照時間点(RT)」と「出来事時間点(ET)」が位置指定できる時に“的”が導入される。このことから、「発話時間点(ST)」の時間が終わってから「様相」に入ることが分かる。

さらに、各時間点を明らかにするために、ここでは時間軸における「参照時間点(RT)」、「出来事時間点(ET)」、「発話時間点(ST)」の位置について〈図 6-5〉で示す。



〈図 6-5：“我吃猪肉，也看过猪跑”の各時間軸〉

時態“过”は以下の〈図 6-6〉のように表す。



〈図 6-6：参照時間軸における“过”③〉

〈図 6-5〉から、“我吃猪肉，也看过猪跑”という「出来事時間点(ET)」が“这辈子”という「参照時間点(RT)」に先行し、これを論理式で示すと「<」(ET, RT)」となる。また、「発話時間点(ST)」は「現在」であるので、時間軸を基準として「参照時間点」は左にあり、「発話時間点」は右側にある。つまり、この場合の「参照時間点(RT)」が「発話時間点(ST)」よに先行するので、論理式で示すと「<」(RT, ST)」となる。

最後に、〈図 6-6〉の時態成分の“过”(～したことがある)は「出来事時間点(ET)」であり、参照時間点より前の「不確定な経験」である。すなわち、「豚肉を食べる回数、“吃”の集合{吃 1, 吃 2, 吃 3, …吃 n}がある」及び「豚が走ることを見た回数、“看”の集合:{看 1, 看 2, 看 3, …看 n}がある」。その食べた時点と・見た時点がいずれか指定できないため、「不確定な経験」であると考え。以上、この段階では「時間点演算」を用いて時間軸における各時間点、及び“过”について説明した。

6.2.3.3 「第三過程」における分析

第三過程「様相演算」について分析する。この段階では、第二過程「時間点演算」を基に、様相(断定)を表す成分“的”を加えると以下の(162c)になる。

(162)c. 我吃过猪肉的，也看过猪跑的。

そこで、(162c)の文を論理式で示すと次の(162c')のようになる。

アラワス ～ガ ～トイウ論理形式の集合ヲ
(162)c'. 有' (的, [様相]) & 有' ([様相], [断定])
エラブ ソノ集合ガ 要素 [断定] ヲ

連言 アラワス ～ガ ～トイウ論理形式の集合ヲ
Λ 有' (的, [様相]) & 有' ([様相], [断定])
エラブ ソノ集合ガ 要素 [断定] ヲ

この論理式は““的”が「様相」という論理形式の集合を表す、かつ、その集合が要素 [断定] を選び、かつ (連言)、“的”が「様相」という論理形式の集合を表す、かつ、その集合が要素 [断定] を選ぶ。」と読む。

(162c)では、“我吃过猪肉，也看过猪跑”という文に“的”を挿入すると“我吃过猪肉的，也看过猪跑的”になる。“的”を挿入することにより [格役割] が消失し、「断定(様相)」の意味を追加することになる。

6.2.3.4 「第四過程」における分析

最後に、第四過程「焦点演算」について分析する。この段階では、第三過程「様相演算」を基に、焦点標識の“是”を加えると以下の(162d)になる。

(162)d. 我是吃过猪肉的，也是看过猪跑的。

そこで、(162d)の文を論理式で示すと次の(162d')のようになる。

トル ～ガ ～トイウ論理形式の集合ヲ

(162)d'. [有' (断定, [焦点]) & 有' ([焦点], 吃)]

アル ソノ [焦点] ガ ～デ

連言 トル ～ガ ～トイウ論理形式の集合ヲ

Λ [有' (断定, [焦点]) & 有' ([焦点], 看)]

アル ソノ [焦点] ガ ～デ

この論理式は「断定が[焦点]という論理形式の集合をとる、かつ、その[焦点]が“吃”である。かつ(連言)、断定が[焦点]という論理形式の集合をとる、かつ、その[焦点]が“看”である。」と読む。

(162d)では、“我吃过猪肉的”と“也看过猪跑的”という文にそれぞれ焦点標識の“是”を挿入することにより焦点が決められるので、焦点は“是”の直後にある“吃”と“看”である。

6.2.3.5 各演算の全体の論理式

これまで述べた時態成分“过”の“是……的”構文における成立過程を基に、(162)の全体の論理式を示すと(162')になる。

(162) 我是吃过猪肉的，也是看过猪跑的。（再掲）

（私は豚肉を食べたことがあった(のだ)、豚が走ることを見たこともあったのだ。）

タベル ～ガ ～ヲ アル ～ガ [経験] ニ
 (162)'. 有' [吃' (我, 猪肉)& 有' { 吃' (我 猪肉), 过 }]

連言 見る ～ガ ～ヲ カツ アル ～ガ [経験] ガ
 ∧ 有' [看' (我, 猪跑) & 有' { 看' (我, 猪跑), 过 }]
 ～コトガ

アル ～ハ ～デ 先行スル ～ガ ～ニ 先行スル ～ガ ～ニ アリ ～ニ ～ガ
 &有' (过, ET) &<' (ET, RT) &<' (RT, ST) &有' (ST, 的)

連言 アル ～ハ ～デ 先行スル ～ガ ～ニ 先行スル ～ガ ～ニ アリ ～ニ ～ガ
 ∧ 有' (过, ET) &<' (ET, RT) &<' (RT, ST) &有' (ST, 的)

アラワス ～ガ ～トイウ論理形式の集合ヲ
 &有' (的, [様相]) &有' ([様相] , [断定])
 エラブ ソノ集合ガ 要素 [断定] ヲ

連言 アラワス ～ガ ～トイウ論理形式の集合ヲ
 ∧ 有' (的, [様相]) &有' ([様相] , [断定])
 エラブ ソノ集合ガ 要素 [断定] ヲ

トル ～ガ ～トイウ論理形式の集合ヲ
 & [有' (断定, [焦点]) & 有' ([焦点], 吃)]
 アル ソノ [焦点] ガ ～デ

連言 トル ～ガ ～トイウ論理形式の集合ヲ
 ∧ [有' (断定, [焦点]) & 有' ([焦点], 看)]
 アル ソノ [焦点] ガ ～デ

この論理式は「私が豚肉を食べる、かつ、私が豚肉を食べることという「経験」がある。かつ、私は豚が走るのを見る。かつ、私は豚が走ることを見た「経験」がある。かつ、“过”(～ことがある)はET(出来事時間点)である、かつ、ETがRT(参照時間点)に先行する、かつ、RTがST(発話時間点)に先行する、かつ、STに“的”がある。連言、“过”(～ことがある)はETである、かつ、ETがRTに先行する。かつ、RTがST(発話時間点)に先行する、かつ、STに“的”がある。かつ、“的”が[様相]という論理形式の集合を表す、かつ、その集合が要素[断定]を選び、かつ(連言)、

“的”が「様相」という論理形式の集合を表す、かつ、その集合が要素〔断定〕を選ぶ。かつ、断定が〔焦点〕という論理形式の集合をとる、かつ、その〔焦点〕が“吃”である。かつ(連言)、断定が〔焦点〕という論理形式の集合をとる、かつ、その〔焦点〕が“看”である。」と読む。

この論理式は四つの演算過程によって構成される。

まず、「私が豚肉を食べる、かつ、私が豚肉を食べることという「経験」がある。かつ、私は豚が走るのを見る。かつ、私は豚が走ることを見た「経験」がある。」という部分は「格役割演算」を表す式である。

次に、「“过”(～ことがある)はET(出来事時間点)である、かつ、ETがRT(参照時間点)に先行する、かつ、RTがST(発話時間点)に先行する、かつ、STに“的”がある。連言、“过”(～ことがある)はETである、かつ、ETがRTに先行する。かつ、RTがST(発話時間点)に先行する、かつ、STに“的”がある。」という部分は「時間点演算」を表す式である。

さらに、「“的”が「様相」という論理形式の集合を表す、かつ、その集合が要素〔断定〕を選び、かつ(連言)、“的”が「様相」という論理形式の集合を表す、かつ、その集合が要素〔断定〕を選ぶ。」という部分は「様相演算」を表す式である。

最後に、「断定が〔焦点〕という論理形式の集合をとる、かつ、その〔焦点〕が“吃”である。かつ(連言)、断定が〔焦点〕という論理形式の集合をとる、かつ、その〔焦点〕が“看”である」という部分は「焦点演算」を表す式である。

上述のように、四つの演算過程を経て(162)の文について論理分析を行った。以上の分析を総合して、文中の“的”は「時間点演算」を終了し、「様相演算」と「焦点演算」を実行する文成分であることがわかる。「断定」、「様相」の“过”は「参照時間軸」の角度から見ると「已然時態」を表す。

6.3 本章のまとめ

本章では、時態を表す成分“过”が“是……的”構文の中に共起する場合において、文が「格役割演算」、「時間点演算」、「様相演算」と「焦点演算」を経て構成されることを示した。また、“是……的”構文の中で時態を表す成分“过”は省略することができない。この場合の“过”は「～したことがある」の意で参照時間点より左の「不確定な経験」を表す。

第7章 “是……的”構文における「様相」と「時態」の意味と論理分析

7.0 はじめに

本章では、“是……的”構文の中の第三過程の「様相演算」の様相を表す成分について論じてゆきたい。これまで、“的”は「断定」と「様相」の意味を示すと主張してきた。しかし、“的”以外に様相を表す成分は存在するので、ここでは“是……的”構文に“的”以外の「様相成分」があるかどうかを検討する。さらに、これらの成分が「時態」と関わるかどうかについて、論理式を用いて解明していきたい。

7.1 様相論理とは何か

方立(2000)は「一般的に「様相論理」は「時制論理」、「可能性論理」、「道義論理」、「認知論理」、「直観論理」など多種の論理を指している。狭義では可能性論理を指し、それは「可能性(possibility)」と「必然性(necessity)」である。「可能性」は基本概念であり、「必然性」は派生概念である。派生概念は“可能性”と“否定”という二つの概念によって派生できるからである。」と述べる。(方立 2000: 254-255)例文をあげると以下のようである。

(163) 赵英不可能不去。(趙英は行かないわけにはいかない。)

(164) 赵英必定去。(趙英は必ず行きます。)

(方立 2000: 254。日本語訳は筆者による。)

(163)の文では、“不”が二つ存在するので、「不+不=必定」になる。すなわち、否定の可能性を否定することにより必然性になる。(164)の文では、“必定(必ず)”があるので、必然性であることがわかる。

方立(2000)は「可能性」と「必然性」も演算子と見なしている。通常可能性演算子と必然性演算子は“◇”と“□”という記号を用いて表すことができ、また“M”と“N”あるいは“L”と“M”を用いて表すこともできる。この二つの演算子の読み方は次の通りである。(方立2000:255)本論では、可能性演算子“◇”と必然性演算子“□”を採用し、分析することにする。

〈I〉 ◇ ϕ (可能性演算子命題 ϕ)

〈II〉 □ ϕ (必然性演算子命題 ϕ)

さらに、方立(2000)は必然性演算子“□”と可能性演算子“◇”の意味について以下の文を例として論じた。

(165)a. Liu Huan can't sing. 刘欢不能唱歌 (劉歡は歌を唱うことができない。)

b. □一sing' (Liu Huan') □一唱歌' (刘欢)

c. ◇一sing' (Liu Huan') ◇一唱歌' (刘欢)

(方立 2000: 263。日本語訳は筆者による。)

方立(2000)は“刘欢能唱歌”に対して以下のように述べた。

必然性演算子“□”の意味によれば、劉歡は論理上可能ないかなる世界においても歌を唱わないのである。もしこの条件が(165a)の文の真理条件であれば、誰も受け入れない。全く歌を唱うことができない人であったとしても、論理上可能な場合において彼が歌を唱うことができるということは全く存在しないとは言えないのである。劉歡のような声楽家であればなおさらである。(後略)

日常のコミュニケーションにおいて、発話には常に一定の背景が存在する。(165)について言えば、この種の背景は「喉が痛いこと」かもしれないし、また「彼が既に三日間連続歌ってすでに疲れていること」かもしれない。これらはいずれも可能な状況である。つまり、発話者がある種の状況について述べているのであり、可能な状況のすべてについて述べているのではない。従って、可能世界の集合に対して若干の制限をかける必要がある。

(方立 2000: 263。日本語訳は筆者による。)

ここで方立(2000)の考えを基に、必然世界と可能世界の角度から論理式を用いて分析する。まず、“刘欢能唱歌”を論理式で示すと次の(166)となる。

(166) 能' {刘欢, 唱' (刘欢, 歌)}

デキル ~ガ

~コトガ

この場合の個体は“刘欢”であり、命題は「唱' (刘欢, 歌)」である。この二つの関係が話し手から判断すると、その判断は「主観的可能性」と「客観的可能性」であると考えられる。一方、“刘欢不能唱歌”を論理式で示すと(167)となる。

(167) 一能' {刘欢, 唱' (刘欢, 歌)}

デキナイ ~ガ

~コトガ

この文において、必然世界の角度から考えると「劉歡は絶対に歌を歌えない」であり、可能世界の角度から考えると「劉歡が三年間で喉が治り、まだ歌える」である。

7.2 様相成分と時態の関係

本章では、様相論理の角度から“是……的”構文の意味と論理構造について分析する。ここでは、主に「可能性」と「必然性」を表す成分“会”、“要”、“可以”、“一定”などについて論じ、最終的に、これらの成分が「時態」と関わるか・関わらないかを検討したい。

「時態」と関わる様相成分が存在することを証明するため、邱鴻康(2002)、袁毓林(2003)と杉村博文(1994)が述べている観点と例文を再検討し、論理式を用い「時態」と間の関係及び意味について分析する。

まず、邱鴻康(2002)が著した《日漢翻译教程》によると、「“是……的”構文の文型は強調の言い方である」と主張している(邱鴻康2002: 26)。さらに、「“是”と“的”の間に動詞フレーズか形容詞フレーズが挿入され、話し手の見方や見解、態度などを表わす。この場合の「是」は動詞であるが、述語の主要な動詞ではなく、ただ強調を表し、語気を強めるだけである。“的”も語気を強調する役割をする。」と述べている。

さらに、邱鴻康(2002)により、「“是”と“的”の間に置かれた動詞フレーズの多くは「動詞＋可能補語」か「能願動詞＋動詞」という形である。」と主張している。

しかし、本章では邱鴻康(2002)の主張に対し、異なる観点があると考ええる。それは「この場合の“是”は動詞であるが、述語の主要な動詞ではなく、ある部分では“是……的”構文は時間体系の時態と関連することがある」と考えている。つまり、ある“是……的”構文の中に、様相の意味を表す成分があることによって時態とかがかわる場合がある。

ここでは、邱鴻康(2002)が挙げている例を分析対象として、時態の角度から再考察することを試みたい。

7.2.1 様相成分“可以”・“一定”・“不”の意味と時態との関係について

7.2.1.1 「未然時態」と関わる場合

(168) 只要努力学习, 汉语是可以学得会的。

(中国語は一生懸命に学びさえすればマスターできる。) (邱鴻康 2002: 26)

(筆者訳: ただ一生懸命学ぶだけで、中国語はマスターすることができたのだ。)(注12)

この例では“汉语是可以学得会的。”という文は「時態」とかがかわる“是……的”構文であると考ええる。その理由は“可以(できる)”が[可能性]を表し、この場合の“可以”は「未然時態」という特定の状態を指しているからである。すなわち、「中国語をマスターする」という出来事はまだない状態にある。従って、この文の中で未然時

態の意味を表す成分“可以”が存在しているので、時態とかかわると分かる。

7.2.1.2 「単純時態」と関わる場合

(169) 小王是一定会来的。

(王さんは必ず来るだろう。) (邱洪康 2002 : 26)

(筆者訳：王さんは必ず来るはずなのだ。)

この例は時態と関わる“是……的”構文であると考え。その理由は“是”の後ろにある“一定(絶対に)”は「必然性」を表し、この場合の“一定”は「単純時態」という特定状態を指しているからである。従って、この文の中で「単純時態」の意味を表す成分“一定”が存在しているので、時態とかかわると分かる。

7.2.1.3 「已然時態」・「単純時態」・「未然時態」と関わる場合

この場合は、“是……的”構文の否定形は挿入した連語や動詞を否定形にすればよい。

(170) 我是不吃鸡肉的。

(私は鶏肉を食べない。) (邱洪康 2002 : 26)

(筆者訳：私は鶏肉を食べないのだ。)

この例は時態とかかわる“是……的”構文であると考え。その理由は“是”の後ろにある“不”は「習慣」の「否定」を表し、この場合の“不”は「已然・単純・未然すべての時態」を指しているからである。

すなわち、私は鶏肉を食べないという出来事において、「すでにこの状態があった」・「進行している状態」・「これからある状態になる。」のこれらの状態の中にそれぞれを指定することができる。従って、この文では“是”と“的”の間にすべての時態を表す成分「習慣の否定」が存在しているので、時態とかかわると分かる。

上述のことから、“可以”、“一定”、“不”を用いた文は「時態」と関わるといえる。

7.2.2 様相成分“知道”・“同意”・“需要”・“容易”の意味及び時態との関係

さらにより深く論証するために、杉村博文(1994)が挙げていた例を再検討する。ここでは“是……的”構文の中に様相を表す成分が存在し、また、これらの様相成分は「時態」と関わるということを分析する。

7.2.2.1 「已然時態」・「単純時態」と関わる場合

(171) 快告诉我，我知道你是知道的。

(早く言いなさい、私はあなたが知っているということは分かっていたのだ。)

(杉村博文 1994 : 142)

この例では“我知道你是知道的”という文は「時態」とかかわる“是……的”構文であるとする。その理由は“是”の後ろに“知道”があるからである。元々“知道(知っている)”は[可能性]を表すが、この文において、“是”により“知道”は[必然性]を表す。

さらに、この場合の“知道”は「已然時態」・「単純時態」を指している。その理由は「 ϕ (誰かが)すでにその出来事を知っていた」、「知っている状態は進行している」という二つの状態にある。従って、この文の中で「必ず」という様相の意味を表す成分“是”が存在しているので、時態とかかわると分かる。

7.2.2.2 「単純時態」・「未然時態」と関わる場合

(172) 你的意见，我是不能同意的。

(君の意見に私は賛成できないのだ。)

(杉村博文 1994 : 141)

この例では“我是不能同意的。”という文は「時態」とかかわる“是……的”構文であるとする。その理由は“不能”は「可能性の否定」を表し、この場合の“不能”は「単純時態」と「未然時態」を指しているからである。

すなわち、私は君の意見に賛成するかどうかという出来事において、「今は賛成しない状態」・「これから賛成しない状態」の二つの状態の中にそれぞれを指定することができる。従って、この文の中で「可能性の否定」という様相の意味を表す成分“不能”が存在しているので、時態とかかわると分かる。

また、もう一つ「単純時態」、「未然時態」と関わるの例について挙げてみよう。

(173) 人有时是需要发发牢骚的。

(人は時には愚痴の一つもこぼすことが必要なのだ。)

(杉村博文 1994 : 141)

この例は時態とかかわる“是……的”構文であるとする。その理由は“需要”が「必然性」を表し、この場合の“需要”は「単純時態」と「未然時態」を指しているからである。

すなわち、“人发牢骚”という出来事において、「今は“牢骚”を話している中(進行している状態)」・「これから“牢骚”がある状態になる」のこの二つ状態の中にそれぞれを

指定することができる。従って、この文の中で「必然性」の様相の意味を表す成分“需要”が存在しているので、時態とかかわると分かる。

7.2.2.3 「已然時態」・「単純時態」・「未然時態」と関わる場合

(174) 一件衣服穿四，五年是很容易破的。

(一着の服を4年も5年も着ることは簡単に壊れるものなのだ)

(杉村博文 1994 : 142)

この例は時態とかかわる“是……的”構文であると考え。その理由は“容易”は「可能性」を表し、この場合の“容易”は「已然時態」・「単純時態」・「未然時態」を指しているからである。

その理由は、服が簡単に壊れるという出来事は「服はすでに壊れる状態があった」・「服が一つの穴を開いて、その穴は徐々大きくなっている状態」・「服が四・五年着ているのでこれから壊れる状態になる。」のこれらの状態の中にそれぞれを指定することができる。従って、この文の中で「可能性」という様相の意味を表す成分“容易”が存在しているので、時態とかかわると分かる。

上述ことから、“知道”、“不能”、“需要”、“容易”を用いて様相を表す成分と「時態」が関わるということが分かる。

7.2.3 様相成分“会”・“要”の意味及び時態との関係について

ここでは、袁毓林(2003)が挙げていた“会”と“要”の例について再検討する。

(175) 他是会对你好一辈子的。(袁毓林2003:11)

(彼があなたに対してずっと良くしてくれるはずだ。)

(176) 我早晚是要找他算账的。(袁毓林 2003:12)

(私はいずれにしても彼女を探して決着するつもりだ。)

(175)と(176)において、袁毓林(2003)は「“会”と“要”は[未来]である」と述べている。

しかし、ここでは“会”は「必然性」を表し、“要”は「可能性」を表す。両方共に「未然時態」と関わり、つまり、「出来事はまだ発生していない」と考える。

それは、龚千炎(1995)が「時間軸において、参照時間点を基準として、参照時間点より左側は“已然”であり、右側は“未然”である」と述べ、さらに、「時制は“過去”、“現在”、“未来”であり、時態は“已然”と“未然”である」と主張していることによ

る。これを基に、“～するはずだ”と“するつもり”という意味の“会「必然性」”と“要「可能性」”は時制ではなく、「様相」であると考ええる。

上述したことから、袁毓林(2003)は「時態」と「時制」を混乱していたと判断され、本論では様相を表す成分の“会”と“要”は「未然時態」と関わると考える。このことを証明するために、論理式を用いて分析を行う。

(175)の文中の“会(～するはずだ)”の「必然性」という意味を示す場合、及び(176)の文中の“要”(～するつもり)”の「可能性」という意味を示す場合において、論理式の展開は以下のようなになる^(注13)。

(175)の“会「必然性□」”と(176)の“要[可能性◇]”の意味を論理分析する。

まず、第一過程「格役割演算」について分析する。この段階では、“是”と“的”が存在しないが、「格」が存在する。次の(175a)と(176a)である。

(175)a. 他会对你好一辈子。

(176)a. 我早晚要找他算账。

まず、(175a)の文を論理式で示すと次の(175a')のようなになる。

～スルハズダ ～ガ ヨクスル ～ガ 対シテダ ～ガ ～二
(175) a'. □対'【 他, 你, 好' (他) & 对' {好' (他), 你}
～ガ ～二

デアル ～ガ ズット
&有' [対' {好' (他), 你}, 一辈子] 』
～トイウ状態二

この論理式は「彼が君に、彼が良くする、かつ、彼が良くすることが君に対してであり、かつ、彼が良くすることが君に対しであることが一生である、という状態にあるはずだ」と読む。

(175a)の文中の“会”は様相[必然性]の意味を表し、論理式では“□”で表記する。また、この文を発話者は、通常は「彼があなたに対して一生良くしてくれるかどうかを確実に知らない、彼はいくつかの必然性を想像できるだけ」という気持ちである。言い換えると「生涯実現される世界は、彼にとってはいくつかの可能世界のうちの一つに過ぎない」ということになる。

また、(176a)の例の論理式は次の(176a')である。

サガス ～ガ ～ヲ イタル ～ガ ～スル ～ガ ～ヲ

(176)a'. ◇找' [我, 他, 找' (我, 他) & 到' {找' (我, 他), 算' (我, 账) }
探ススルツモリ ～ガ ～ニ

デアル ～ガ イズレ
&有' {算' (我, 账), 早晚}]
～トイウ状態ニ

この論理式は「私が彼に対し、私が彼を探す、かつ、私が彼を探すことが私が決着することに至る、かつ、私が決着することがいずれであるという状態にあることをするつもりである。」と読む。

(176a)の文中の“要”は様相[可能性]の意味を表し、論理式では“◇”で表記する。また、この文の発話者は、「彼を探すかどうかを確実に知らない、彼を探すことにはいくつかの可能性を想像できるだけ」という気持ちである。言い換えると「彼を探して決着する世界は、彼にとってはいくつかの可能性のうちに一つに過ぎない」ということになる。

以上、第一段階では「格役割演算」を用いて「必然性」の意味を示す“会”と「可能性」の意味を示す“要”について論理分析を試みた。

次に、第二過程「時間点演算」について分析する。この段階では、第一過程「格役割演算」を基に、「時間点」を加えると(175a)は以下の(175b)になる。

(175)b. 他会对你好一辈子+「時間点」(“会”：「必然性」)

そこで、(175b)の文を論理式で示すと次の(175b')のようになる。

アル ヨクスル～ガ 対シテダ ～ガ ～ニ

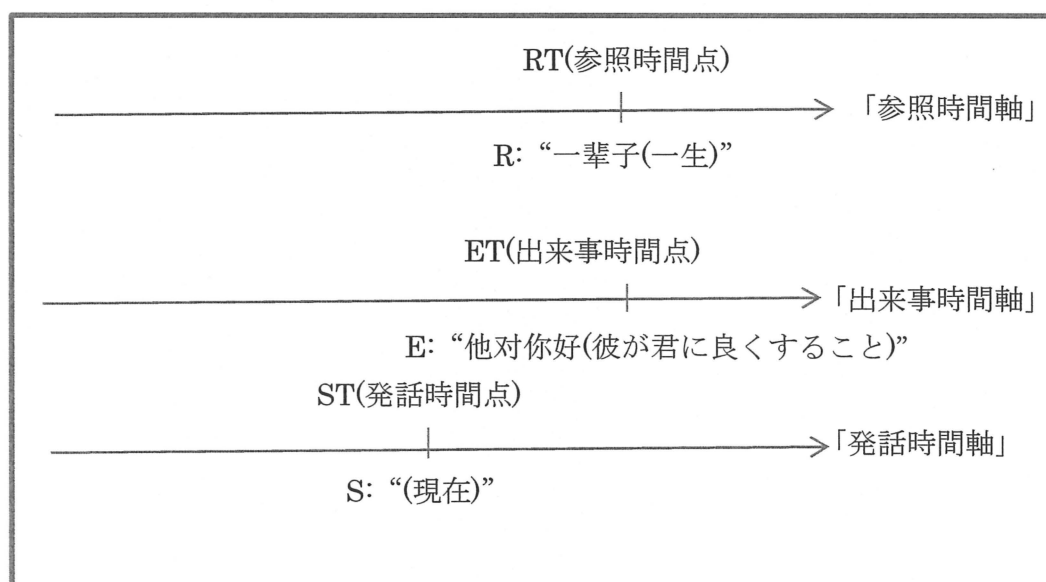
(175)b'. 有' (対' [他, 你, 好' (他) & 対' {好' (他), 你}
対スル ～ガ ～ニ
デアル ～ガ ズット [出来事時間点]ガ
&有'[対' {好' (他), 你}, 一辈子]],ET)

ヒトシイ ～ガ ～ニ 後行スル～ガ ～ニ モツ ～ガ ～ヲ
&=' (ET,RT) & >' (RT,ST) &有' (ST,的)

この論理式は「彼が君に、彼が良くする、かつ、彼が良くすることが君に対してであり、かつ、彼が良くすることが君に対し一生であることにET(出来事時間点)があ

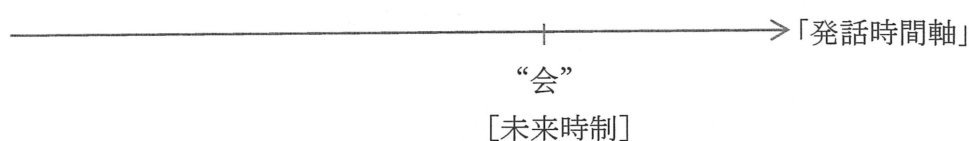
る、かつ、ETがRT(参照時間点)に等しい、かつ、RTがST(発話時間点)に後行する、かつ、STが“的”を持つ。」と読む。

さらに、各時間点を明らかにするために、ここでは時間軸における「参照時間点(RT)」、「出来事時間点(ET)」、「発話時間点(ST)」及び「必然性」の“会”の位置について、〈図 7-1〉で示す。



〈図 7-1 : “他会对你好一辈子” の各時間軸〉

様相を表す成分“会”の「時間軸」における時間点は以下の〈図 7-2〉のように表す。



〈図 7-2 : 発話時間軸における“会”〉

〈図 7-1〉と〈図 7-2〉の「各時間軸」から見ると、ET(出来事時間点)と RT(参照時間点)は同時にあり、RT は ST(発話時間点)より後にある。さらに、「発話時間軸」の角度から「必然性」の“会”を見ると「出来事はまだ発生していない」の[未来時制]であることが分かる。

また、(176a)に「時間点」を加えると(176b)となる。

(176)b. 我早晚要找他算账。+「時間点」(“要”：「可能性」)

この文を論理式で示すと次の(176b')のようになる。

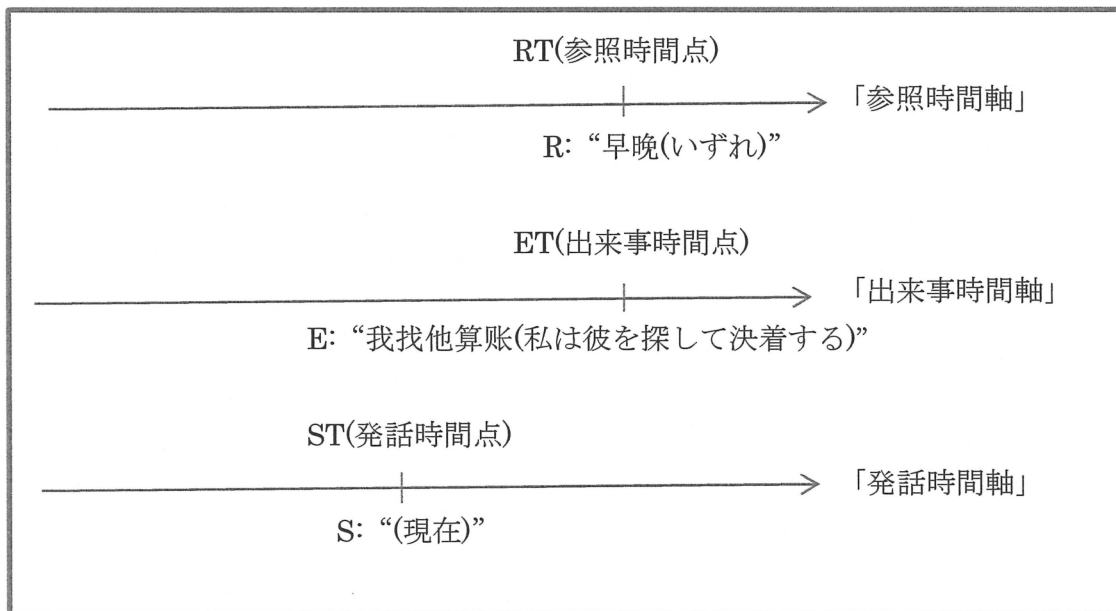
サガス ～ガ ～ヲ イタル ～ガ ～スル ～ガ ～ヲ
 (176)b'. 找'【我，他，找'（我，他）&到' {找'（我，他），算'（我，账）}
 アル

デアル ～ガ イズレ アリ ～ガ [出来事時間点]ガ
 &有' {算'（我，账），早晚} &有' [有' {算'（我，账），早晚}，ET]

ヒトシイ ～ガ ～ニ 後行スル ～ガ ～ニ モツ ～ガ ～ヲ
 &=' (ET, RT) & >' (RT, ST) & 有' (ST, 的)

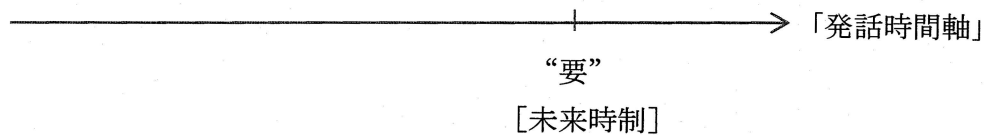
この論理式は「私が彼に対し彼を探す、かつ、私が彼を探すことが私が決着することに至る、かつ、私が決着することがいずれであることはET(出来事時間点)である。かつ、ETがRT(参照時間点)に等しい、かつ、RTがST(発話時間点)に後行する、かつ、STが“的”を持つ。」と読む。

さらに、各時間点を明らかにするために、ここでは時間軸における“参照時間点(RT)”、“出来事時間点(ET)”、“発話時間点(ST)”及び「可能性」の“要”の位置について〈図 7-3〉で示す。



〈図 7-3：“我早晚要找他算账。”の各時間軸〉

様相を表す成分“要”の「時間軸」における時間点は以下の〈図 7-4〉のように表す。



〈図7-4：発話時間軸における“要”〉

〈図 7-3〉の「各時間軸」から見ると、ET(出来事時間点)と RT(参照時間点)は同時にあり、RT は ST(発話時間点)より後にある。

さらに、〈図 7-4〉の「発話時間軸」の角度から「可能性」の“要”を見ると「出来事はまだ発生していない」の[未来時制]であることが分かる。

以上の分析から、(175)の論理式は[未来時制]を表す助動詞“会”が“是……的”構文に用いられることを示している。従って、[必然性]の“会”は[時制]、「時態」と関わる事が証明され、(17)の論理式は[未来時制]を表す助動詞“要”が“是… …的”構文に用いられることを示している。

従って、[可能性]の“要”は[時制]、「時態」と関わる事が分かる。

7.2.4 本節のまとめ：

上述したことから、邱鴻康(2002)は述べていた「可能」の意を表す“可以”、「必然性」の意を表す“一定”、「否定」を表す“不”は様相論理の角度から「時態」と関わる事が分かる。

また、杉村博文(1994)が述べていた“知道”、“不能”、“需要”、“容易”も様相論理の角度から「時態」と関わる。さらに、袁毓林(2003)の用例の“会”、“要”も、様相論理の角度から「時態」と関わる。最後に、これらの成分と「時態」との関係を〈表7-1〉で示すと以下ようになる。

様相成分	已然時態	単純時態	未然時態	様相世界
“可以”	—	—	+	[可能性]
“一定”	—	+	—	[必然性]
“不”	+	+	+	[習慣]
“知道”	+	+		[必然性]
“不能”	—	+	+	[可能性]
“需要”	—	+	+	[必然性]
“容易”	+	+	+	[可能性]
“会”	—	—	+	[必然性]
“要”	—	—	+	[可能性]

〈表7-1：様相成分と時間体系の分類図〉

〈表7-1〉では、“+”は「時態」と関わる成分であり、“—”は「時態」と関わらない成分であることが分かる。

そして、「習慣」も「已然時態」・「単純時態」・「未然時態」のすべての時態を示すことが分かる。

7.3 「時態」と関わらない様相成分についての考察

7.3.1 「時態」と関わらない“挺”の場合

すべての様相成分が「時態」と関わるわけではなく、「時態」と関わらない成分も存在する。「時態」と関わらない様相成分が存在することを示すため、邱鴻康(2002)が述べている観点と例文を再検討する。

(177) 噢，课是挺有意思的，可是布置的作业和要写的报告太多了。

(うん、面白かったけど、宿題やレポートがすごく多かったなあ。)

(邱洪康2002：26)

(筆者訳：うん、授業は非常に面白かったんだ。でも、出された宿題や書くべきレポートがすごく多かった。)

この例は“课是挺有意思的”という文は「時態」とかかわらない“是……的”構文である。その理由は“挺”が[程度]を表し、「授業は面白い」という出来事を特定の状態として指していないからである。この文では“是”と“的”の間に様相を表す成分が存在していないので、時態とかかわらないと分かる。

7.3.2 「時態」と関わない“有”の場合

(178) 只要50元钱的话,我是有的。

(50元だけ必要なら、私は持っていますよ。)(邱洪康2002:26)

(筆者訳:50元だけ必要なら、私は用意できるのだ。)

この例は“我是有的”が「時態」とかかわらない“是……的”構文である。その理由は“有”が[状態(保有)]を表し、この場合の“有”は已然の「すでに50元を持ったか」、また、単純時態の「今持っている状態にあるか」、或いは未然の「今50元を持っていないが、これから50元を持つ状態にあるか」という特定の状態を指していないからである。この文では“是”と“的”の間に様相を表す成分が存在していないので、時態とかかわらないと分かる。

7.3.3 「時態」と関わない“赞成”の場合

(179) 她丈夫是赞成她出去工作的。

(彼女が仕事に出るのにご主人は賛成している。)(邱洪康2002:26)

(筆者訳:彼女の主人は彼女が仕事に出ることは賛成しているのだ)

この例は「時態」とかかわらない“是……的”構文である。その理由は“赞成”が[心理活動]を表し、「彼女が仕事に出る」という出来事が已然の「賛成した状態にあるのか」、また、単純時態の「今賛成している(考え中)状態にあるのか」、或いは未然の「今賛成していないが、これから賛成するに至る状態か」という特定の状態を指していないからである。この文の中では様相を表す成分が存在していないので、時態とかかわらないと分かる。

上述したことから、“挺”、“有”、“赞成”を用いた“是……的”構文は「時態」と関わないことが分かる。

7.4 本章のまとめ

本章では、“是……的”構文において、“的”以外の「様相」を表す成分があるがどうかについて、「可能世界」の「必然性」と「可能性」の分析によって[様相成分]が存在することを示した。また、これらの「様相」を表す成分が「時態」と関わる場合と関わない場合の両方が存在することを示した。

「時態」と関わる成分はそれぞれの状態から見ると、一つの特定の状態を指す場合がある。それは「未然時態」と関わる“可以”、“会”と“要”であり、「単純時態」の“一定”と“不能”である。二つの状態のそれぞれを指定する場合もある。それは、「已然時態」・「単純時態」の“知道”であり、「単純時態」・「未然時態」の“需要”である。

さらに、三つの状態の中にそれぞれを指定する場合もある。それは、「已然時態」・「単純時態」・「未然時態」の“不”と“容易”である。これらはすべての「時態」と関わる「様相成分」であるということを示した。しかし、「時態」と関わらない成分も存在し、それは“挺”、“有”、“賛成”である。本章は、挙げた「時態」と関わる、及び関わらない「様相成分」は言及したものだけではなく、他に様相を表す成分も存在すると考えられるが、これらは今後の研究に俟ちたい。

結び

本研究では、「現代中国語の焦点の意味の諸相」について「“是……的”構文の意味と論理」を中心として、形式意味論の方法を用いて論理構造を記述し考察した。第1章では、“是……的”構文に関する“是”と“的”の各形式について論じている先行研究の中から本論で特に参考とした研究を取り上げた。また、本論で用いる形式意味論の基本的考え方や方法を述べた。

第2章では、中国語の“是……的”構文は非典型的“是”構文として、「格役割演算」、「時間点演算」、「焦点演算」、「様相演算」という四つの演算過程によって構成されることを示した。

成立過程は以下の四点である。

①第一過程の「格役割演算」は「格」の演算であり、ここで論じる「格役割」は「動作主格」、「対象格」、「着点格」、「経験者格」などである。

②第二過程の「時間点演算」については龚千炎(1995)が提起した時間体系の観点に基づいて述べる。

③第三過程の「様相演算」は「可能性」と「必然性」等の意味を表す。

さらに、“是……的”構文の中で“的”は様相を表すということを考える。

④第四過程の「焦点演算」については徐烈炯(2003)の理論に従い、焦点は“是”の直後の部分であると考ええる。

第3章は二つの節に分け、第一節は“是……的”構文の焦点について述べた。主に刘丹青・徐烈炯(1998)と袁毓林(2003)の焦点に関する論考に基に、“是……的”構文における焦点の分析法を提示し、論理式を用いて分析した。また、この節の考察で採用した「±排他性」・「±突出性」という概念は“是……的”構文以外の言語現象にも説明として用いることができる。

第二節は「位置置換焦点」について述べた。刘丹青・徐烈炯(1998)と徐烈炯(2002)の分析法を基に、陆俭明(1980)が主張している位置置換という現象に対し、後置された部分を「焦点」と見なし、陆俭明(1980)が言及していない「意味操作」に着目にして「位置置換現象」を考察する。そこで焦点の定義は以下の三点である。

- (1) 焦点はその前に音声の停頓がない。
- (2) 焦点はストレス(強勢)が置かれない。
- (3) 通常焦点は文末に置かれる。

この焦点の定義を基に、後置された“状語”、“受け身と中心語”、“都”、“还”、“就”“快”などの成分の位置置換について考察し、最終的に、第一節の考察で採用した焦点の分析法「±突出性」・「±排他性」が「位置置換文」に適用できることを論じた。

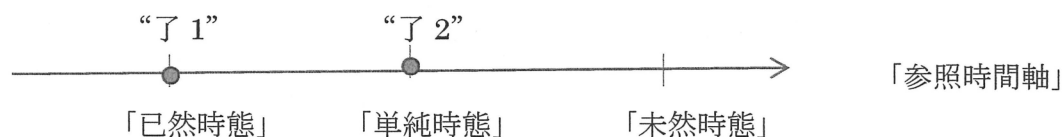
第4章から第6章では、“是……的”構文の中で、「時態」を表す“了”、“着”、“过”それぞれの成分について、“是……的”構文の中に共存することを論じた。ここでは、龚千炎(1995)の捉え方を参考に分析する。龚千炎(1995)が著した《汉语的时相时制时态》は「中国語の時間体系は“文の時制構造”、“文の時相構造”、“文の時態構造”によって構成される」とする。ここでは“時態構造”の観点参照しながら分析した。龚千炎(1995)により時態は「事件がある段階にある特定の状態を指すことであり、時態は“已然時態”と“未然時態”である」と述べる。しかし、本研究では時態を「已然時態」と「未然時態」によって構成されるだけでなく、「単純時態」(陈平：1988)も存在していると考え。ここでは、筆者も「単純時態」に対して分類を検討する。

そこで、時態を表す成分の“了”を動詞後の“了1”(動作完了)と文末の“了2”(状態の実現)に分類し、時態成分“了”が“是……的”構文の中に共起する場合の演算成立過程について考察する。

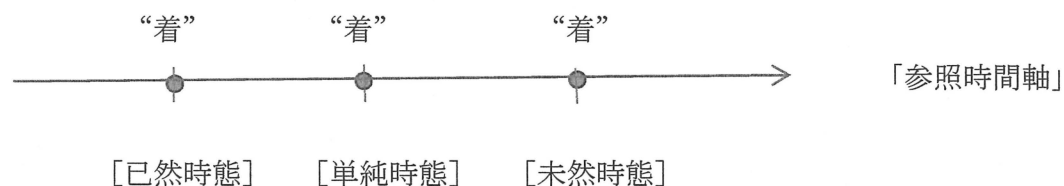
第5章は時態を表す成分“着”について分析を行う。杉村博文(1994)は“着”を持続助詞と名付け、「動作行為それ自体が開始後あるいは実現後に「一定の状態を保っていることを表す」と述べる。本研究は龚千炎(1995)を参考し、“着”は参照時間点(RT)における[持続]あり、いわゆる、已然であると考え。第6章では、“过”が共起する場合で、袁毓林(2003)が挙げた例について意味と論理分析を行う。

ここで、第2章の「格役割演算」、「時間点演算」、「様相演算」、「焦点演算」の四つの過程を考察して意味と論理を検討する。また、各時態成分の間の違いを明確に示すため、時間軸を用いて「参照時間点」、「出来事時間点」、「発話時間点」の各時間点を詳しく示した。以上のことを総合し“了”、“着”、“过”を時間軸で示すと以下の通りである。

(1) 時態“了”は以下のように示す。

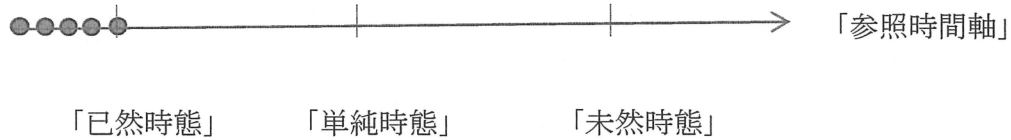


(2) 時態“着”は以下のように示す。



(3) 時態“过”は以下のように示す。

“过”：(RT より前の不確定な経験)



上述のことから、“是……的”構文の中で時態を表す成分“了”は動詞の性質によっては省略することができない。その理由は、この場合の“了”は“了1”は[完了]の意を表し、参照時間点より已然の「完了・実現時態」を表す。また、「参照時間軸」において、時態成分の“了1”は「已然時態」を表し、“了2”は「単純時態」の「発生」を表すようになる。そこで、文中の“的”は…[完了]、[過去]、[断定]の意味を表すことを示した。

また、“是……的”構文の中で時態を表す成分“着”は省略することができない。その理由は、この場合の“着”は「～をし続ける」の意で参照時間点より前の「結果の持続」を表す。また、「参照時間軸」において、時態成分の“着”が「已然時態」、「単純時態」、「未然時態」を表すようになる。そこで、文中の“的”は「結果持続」、[進行]、[断定]の意味を表すことを示した。

“是……的”構文の中で時態を表す成分“过”は省略することができない。その理由は、この場合の“过”（「～したことがある」）は参照時間点より前の「不確定な経験」を表す。また、「参照時間軸」において、時態成分の“过”が「已然時態」を表すようになる。そこで、文中の“的”は「(不確定な) 経験」、「断定」、「様相」の意味を表すことを示した。

最後に、第7章は“是……的”構文における「様相」と「時態」について述べた。これまで、“的”は「断定」と「様相」の意味を示すと主張してきたが、“的”以外に様相を表す成分が存在するので、ここでは“是……的”構文に“的”以外の「様相」を表す成分があるかどうかについて、「必然性」と「可能性」の分析によって[様相成分]が存在することを示した。また、これらの「様相」を表す成分が「時態」と関わる場合と関わらない場合の両方が存在することを示した。

表一覧

表 1-1: 李临定 1986 “是” の文型分類	pp. 6-10
表 1-2: 朱德熙 1982 の“的”構造の分類	p. 16
表 1-3: 連言「&」の真理値表	p. 22
表 1-4: 可能世界真理値表	p. 23
表 7-1: 様相成分と時間体系の分類図	p. 154

図一覧

図 1-1: 命題 p の可能世界から真理値への関数	p. 24
図 1-2: 命題 q の可能世界から真理値への関数	p. 24
図 1-3: 命題 $p \& q$ の可能世界から真理値への関数	p. 24
図 2-1: “我是昨天进的城。”の成立過程図	p. 35
図 2-2: “小王是第一个跳下去。”の成立過程図	p. 36
図 2-3: “王大夫是用中草药治好关节炎的。”の成立過程図	p. 36
図 4-1: 時間軸	p. 78
図 4-2: 時態チェーン	p. 80
図 4-3: 時態の分類図	p. 80
図 4-4: “严仲平频频颌首，显然多少领略了其中的奥妙了”の各時間軸	p. 87
図 4-5: 出来事時間軸における“领略了 ₁ ”と“奥妙了 ₂ ”	p. 87
図 4-6: “种牛自己吃了有毒的草，中毒死了”の各時間軸	p. 92
図 4-7: 出来事時間軸における“吃了 ₁ ”と“死了 ₂ ”	p. 92
図 4-8: “妈妈打电话叫来了医生了”の各時間軸	p. 97
図 4-9: 出来事時間軸における“医生了 ₁ ”と“叫来了 ₂ ”	p. 97
図 5-1: 参照時間軸における時態成分“着”について	p. 106
図 5-2: 発話時間軸における時態+時制成分“在”について	p. 106
図 5-3: “我估摸鲁迅先生就照着白小才写出阿 Q!”の各時間軸	p. 112
図 5-4: 発話時間軸における“着”	p. 112
図 5-5: “当初凑合着结婚”の各時間軸	p. 117
図 5-6: 参照時間軸における“着”①	p. 117
図 5-7: 参照時間軸における“着”②	p. 120
図 6-1: “自杀者有过”の各時間軸	p. 127
図 6-2: 参照時間軸における“过”①	p. 128
図 6-3: “我和你妈妈商量过”の各時間軸	p. 133
図 6-4: 参照時間軸における“过”②	p. 133
図 6-5: “我吃过猪肉，也看过猪跑”の各時間軸	p. 138
図 6-6: 参照時間軸における“过”③	p. 138

図 7-1: “他会对你好一辈子” の各時間軸	p. 151
図 7-2: 発話時間軸における “会”	p. 151
図 7-3: “我早晚要找他算账。” の各時間軸	p. 152
図 7-4: 発話時間軸における “要”	p. 153

注釈

序章

1. 非典型的“是”構文の文法形式は“話題—説明の標記”であり、意味形式は“メタファー、転喩あるいは叙述の同等あるいは類属”である。この時“是”の特徴は“焦点断定”であり、この場合の“是”字句の状況は複雑である。

第1章

2. 張和友(2012: 92)が、「焦点文」と呼ぶ理由は二点がある。
 - ①例えば、中国語の“是……的”構文、また英語の“It is X that”構造は共に発話者が、出来事のある要素を突出させる方法である。
 - ②「焦点」は文中の情報の重要レベルを示す。
3. 論理式に付けた「カタカナ」は論理式の読み方である。

第2章

4. 典型的“是”構文の文法形式は“VP1—是—NP2”であり、意味形式は“実体/名物—断定—実体/名物”である。また、この時の“是”の意味特徴は“典型断定”である。さらに、この文法と意味の間は同構(対応)となることができる。
5. 准典型的“是”構文の文法形式は“VP(節Sを含む)/VP的—是—VP/NP/PP”であり、意味形式は“指称化した後の同等あるいは類属”である。また、“是”の意味特徴は“準断定”である。さらに、この場合の“是”字句の中に含まれる“動詞”成分は必ず“指称化”を経て典型構造の意味形式の中に入ることができる。(指称化するとき形態変化がない)
6. 非典型的“是”構文の文法形式は“話題—説明の標記”であり、意味形式は“メタファー、転喩あるいは叙述性間の同等あるいは類属”である。また、この時の“是”の特徴は“焦点化断定”であり、この場合の“是”字句の状況は複雑である。

第3章

7. 方立(2000)は、集合論について次のように述べている。

集合

集合は、数学中の基本的な概念である。(中略)

我々がいくつかの事物を一つの全体として考えるとき、この全体を集合と呼ぶ。事「物」は「個体」とも呼ぶ。(中略)集合を構成する個体は同類のものである。実は、同類ではない個体も集合を構成することができる。(中略)集合中の個体はしばしば「要素」或いは「メンバー」と呼ぶ。

集合論の中で、一般的に小文字で要素を表し、大文字で集合を表し、そして記号 \in で要素と集合の関係を表す。従って、「 $a \in A$ 」は、「 a は集合 A の要

素（メンバー）である」と理解すべきである、或いは、「a が集合 A に属す」と呼んでもよい。もし、a は A の要素ではないならば、「 $a \notin A$ 」で表記する。集合論の基本原則は、一つの個体はある集合のメンバーであるか、或いはその集合のメンバーではないのいずれかであり、中間的メンバーの資格が存在しないことである。

(方立 2000 : 38)

第 5 章

8. “着”は「持続」を表す。しかし、次の i)・iii)に示すように動詞によって表示する「持続」の性質も異なる。

i) 5.2.1 例(125)の“发展着”の“着”：[已然時態・単純時態・未然時態]

ii) 5.2.2.1 例(126)の“照着”の“着”：[已然時態・単純時態]

iii) 5.2.2.2 例(127)の“凑合着”の“着”：[已然時態・単純時態]

9. “在”と“着”が共起する場合について、横山昌子(2017)は以下の観点を主張している。

活動動詞は、動的持続の特徴を持つため、進行時態を表す“在/正在”と持続動詞を表す“着”と共起できる。時量補語を伴う場合は、動作行為の持続時間を表す。(横山昌子 2017 : 148)

また、現代中国語の時態助詞“着”が「動作の結果の持続」と「持続の持続」の二つの持続を表すことについて、“着”を含む文の論理構造を記述し、二つの持続の意味が「時相」特徴の違いから生じることを論じている。さらに、「時相」と「時態」の関係について、「動作の結果の持続」を表す“着”が生起する文だけでなく、「動作の持続」を表す“着”が生起する文でも時相が充足していると指摘している。

10. “在”が「進行」の意味を表すと解した理由は以下の研究者による見解を総括して判断した結果である。

・马真(2004)や张谊生(2004)は時間副詞“在”は時態成分の役割を果たしえると主張し、その根拠としては“在”は「過去」、「未来」、「現在」のいずれの時制においても生起する可能性を持つと見なした。

・潘文娱(1980)は“在”は「動作が持続している、或いは進行中である」と述べ、刘月华等(2001)は“在”は「動作の進行」と述べている。

・张斌主编(2001)では“在”は「動作行為や性質の状態が進行、或いは持続中である」と述べおり、卢福波(2010)によると“在”は「現在、或いはある時点、ある時間幅における動作の進行性である」。

第 6 章

11. ここでいう「メタ言語」とは論理式の上下に記されたカタカナの意味解釈のことを指

す。

第7章

12. ここで、筆者の翻訳を加える理由は、邱鴻康(2002)が「断定」の角度から“是……的”構文を翻訳するわけではないので、本論の考えを基に、再検討する必要があるからである。
13. これまで、“是……的”構文の成立過程は四つの過程を経て成立できると述べてきた。しかし、この章では、主に、“的”以外の様相成分と「時態」間の関係を証明するものである。より明確に“会”、“要”と「時態」との関係を示すために、ここでは、第一過程の[格役割演算]と第二過程の[時間点演算]を用いて検討する。さらに、煩雑化を避けるため、ここで第三過程“的”における[様相演算]と第四過程の[焦点演算]を省略することにする。

参考文献

〈中国語文献〉

- 蔡淑美 2010. 〈特殊与格结构“V+X+的+O”的语义性质和句法结构〉,《世界汉语教学》第3期。
- 陈平 1988. 〈论现代汉语时间系统的三元结构〉,《中国语文》第6期。
- 陈贤纯 1979. 〈句末“了”是语气助词吗〉,《语言教学与研究》第1期。
- 邓思颖 2017. 《汉语“的”的研究》。北京:北京大学出版社。
- 方立 2000. 《逻辑语义学》。北京:北京语言大学出版社。
- 龚千炎 1995. 《汉语的时相 时制 时态》。北京:商务印书馆。
- 韩梅 2005. 〈“是……的”句的句法语义分析〉,《东疆学刊》。
- 何元建 2011. 《现代汉语生成语法》。北京:北京大学出版社。
- 黄瓚辉 2003. 〈焦点、焦点结构及焦点的性质研究综述〉,《现代外语季刊》第4期。
- 黄正德 2007. 〈汉语动词的题元结构与其句法表现〉,《语言科学》第6卷,第4期。
- 李宝伦·潘海华·徐烈炯 2003a. 〈对焦点敏感的结构及焦点的语义解释·上〉,《当代语言学》第1期, pp. 1-11。
- 2003b. 〈对焦点敏感的结构及焦点的语义解释·下〉,《当代语言学》第2期, pp. 108-119。
- 李临定 1986. 《现代汉语句型》。北京:商务印书馆。
- 2011. 《现代汉语句型(增订本)》。北京:商务印书馆。
- 李纳·安珊笛·张伯江 1998. 〈从话语角度论证语气词“的”〉,《中国语文》第2期。
- 刘龑 2016. 〈虚词“了”的语法功能考〉,《神奈川大学人文学研究所報》55号, pp. 31-42。
- 刘丹青·徐烈炯 1998. 〈焦点与背景、话题及汉语“连”字句〉,《中国语文》第4期。
- 刘勋宁 1988. 〈现代汉语的句子构造与词尾“了”的句法位置〉,《中国语文》第5期。
- 刘月华等 2001. 《实用现代汉语语法(增订本)》。北京:商务印书馆。
- 卢福波 2010. 《汉语语法教学理论与方法》。北京:北京大学出版社。
- 陆丙甫 1979. 〈读“的”字结构和判断句〉,《中国语文》第4期。
- 陆俭明 1980. 〈汉语口语句法里的易位现象〉,《中国语文》第1期。
- 1999. 〈“着”字补义〉,《中国语文》第5期。
- 吕必松 1982. 〈关于“是……的”结构的几个问题〉,《语言教学与研究》第4期。
- 吕叔湘 主编 1980. 《现代汉语八百词》。北京:商务印书馆。
- 主编 1999. 《现代汉语八百词(增订本)》。北京:商务印书馆。
- 吕文华 1983. 〈“了”与句子语气的完整及其它〉,《语言教学与研究》第3期。
- 马学良·史有为 1982. 〈说“哪儿上的”及其“的”〉,《语言研究》,第1期。
- 马真 2004. 《现代汉语虚词研究方法论》。北京:商务印书馆。
- 木村英树 1983. 〈关于补语性词语“着/zhe”和“了/le”〉,《语文研究》,第2期。

- 2003. 〈“的”字句的句式语义及“的”字的功能扩展〉,《中国语文》第4期。
- 牛秀兰 1991. 〈关于“是……的”结构句的宾语位置问题〉,《世界汉语教学》第3期。
- 潘文娱 1980. 〈谈谈“正”“在”和“正在”〉,《语言教学与研究》第1期。
- 齐沪扬·张秋杭 2005. 〈“是……的”句研究述评〉,《广播电视大学学报》(哲学社会科学版)第4期。
- 邱鸿康 2002. 《日汉翻译教程》。北京:北京语言文化大学出版社。
- 杉村博文 1999. 〈“的”字结构、承指与分类〉,见江蓝生、侯精一主编《汉语现状与历史的研究》。北京:中国社会科学出版社。
- 2017. 《现代汉语语法研究》——「以日语为参考系」。大阪:大阪大学出版社。
- 宋玉柱 1979. 〈关于“是……的”结构的分析〉,《天津师院学报》第4期。
- 1981. 《现代汉语语法论集》。天津:人民出版社。
- 王力 2011. 《中国现代语法》。北京:商务印书馆。
- 徐杰 2001. 《普遍语法原则与汉语语法现象》。北京大学出版社。
- 徐烈炯 2002. 〈汉语是话语概念结构化语言吗?〉,《中国语文》第5期。
- 2009. 《指称、语序和语义解释——徐烈炯语言学论文选择》。商务印书馆。
- 徐烈炯·刘丹青 1998. 《话题的结构与功能》。上海:上海教育出版社。
- 2003. 〈话题与焦点新论〉,《中国语文》第1期。
- 2007. 《话题的结构与功能(增订本)》。上海:上海教育出版社。
- 杨凯荣 2016. 〈句中成分的焦点化动因及优先度等级——从事件句到说明句〉,『中国語学』263号。日本中国語学会。
- 袁毓林 2000. 〈论否定句的焦点,预设和辖域歧义〉,《中国语文》第2期。
- 2003. 〈从焦点理论看句尾“的”的句法语义功能〉,《中国语文》第1期。
- 2012. 《汉语句子的焦点结构和语义解释》。北京:商务印书馆。
- 张宝林 2015. 《汉语语法的多层面考察》。北京:语言大学出版社。
- 张斌[编]2001. 《现代汉语虚词词典》。北京:商务印书馆。
- 张伯江·方梅 1994. 〈汉语口语的主位结构〉,《北京大学学报》(哲学社会科学版)第2期。
- 张登岐 2005. 《汉语语法问题论稿》,合肥:安徽大学出版社。
- 张和友 2001. 〈“NP1+是+VP的+NP2”句浅谈〉,《西南民族学院学报》(哲学社会科学版)第2期。
- 2006. 〈聚焦式“是”字句的句法,语义特点〉,《语言教学与研究》第1期。
- 2012. 《“是”字结构的句法语义研究——汉语语义性特点的一个视角》。北京:北京大学出版社。
- 张晓玲 1986. 〈试论“过”与“了”的关系〉,《语言教学与研究》第1期。
- 张谊生 2004. 《现代汉语副词搜索》。上海:学林出版社。
- 赵淑华 1979. 〈关于“是……的”句〉,《语言教学与研究》第1期。

- 朱德熙 1961. 〈说“的”〉,《中国语文》第 12 期。(朱德熙 1980《现代汉语语法研究》, pp. 67-103。)
- 1966. 〈关于《说“的”》〉,《中国语文》第 1 期。(朱德熙 1980《现代汉语语法研究》, pp. 104-124。)
- 1978a. 〈“的”字结构和判断句(上)〉,《中国语文》第 1 期。(朱德熙 1980《现代汉语语法研究》, pp. 125-150。)
- 1978b. 〈“的”字结构和判断句(下)〉,《中国语文》第 2 期。(朱德熙 1980《现代汉语语法研究》, pp. 125-150。)
- 1980. 《现代汉语语法研究》。北京: 商务印书馆。
- 1982. 《语法讲义》。北京: 商务印书馆。
- 2010. 《语法分析讲稿》袁毓林整理注释。北京: 商务印书馆。
- 朱庆祥 2017. 〈从叙事语篇视角看“了₂”的结句(段)问题〉,《语言教学与研究》第 6 期。

〈日本語文献〉

- 青木萌 2013a. 「時態成分“在”の時制構造における意味と論理」,『人文研究』180 号: 神奈川大学人文学会. pp. 87-115。
- 2013b. 「時態成分“在”の生成過程」,『人文研究』181 号: 神奈川大学人文学会. pp. 157-179。
- 2015. 「“(是)……的”構文の焦点対象について」,『日本中国語学会第 65 回全国大会予稿集』。好文出版。
- 2016. 「朱德熙(1978)の S4 “的”構造について」,『人文研究』187 号: 神奈川大学人文学会. pp. 141-170。
- 2017. 「“(是)……的”構文の幾つかの問題について」,『人文研究』192 号: 神奈川大学人文学会. pp. 19-50。
- 安藤貞雄・小野隆啓 1993. 『生成文法用語辞典』。東京: 大修館書店。
- 石綿敏雄 1999. 『現代言語学と格』。東京: ひつじ書房。
- 小野秀樹 2008. 「“的”のモノ化機能」,『統辞論における中国語名詞句の意味と機能』。東京: 朋友書店。
- 木村英樹 2012. 『中国語文法の意味とかたち—「虚」的意味の形態化と構造化に関する研究』。白帝社。
- 野矢茂樹 1994. 『論理学』。東京: 東京大学出版会。
- フィルモア, チャールズ・J. 著、田中春美・船城道雄訳 1975. 『格文法の原理—言語の意味と構造』。東京: 三省堂。
- 松村文芳 2015、2016、2017. 講義ノート: 神奈川大学大学院中国語学特殊研究Ⅲa/b
- 2017. 『現代中国語の意味論序説』。東京: ひつじ書房。

- 白井賢一郎 1985. 『形式意味論入門—言語・論理・認知の世界』。東京：産業図書。
- 朱德熙著，杉村博文・木村英樹訳 1995. 『文法講義』。東京：白帝社。
- 杉村博文 1994. 『中国語文法教室』。東京：大修館書店。
- 杉本孝司 1998. 『意味論 1—形式意味論—』。東京：くろしお出版。
- 田中拓郎 2016. 『形式意味論入門』。東京：開拓社。
- 藤堂明保・相原茂 1985. 『中国語概論』。東京：大修館書店。
- ウィトゲンシュタイン・L. 著，野矢茂樹訳 2003. 『論理哲学論考』。東京：岩波書店。
- 横山昌子 2017. 「時態助詞“着”の意味と時相構造」、『言語と文化論集』第 23 号。神奈川大学大学院外国語学研究科。 pp. 115-138。
- 松浦百恵 2018. 「“是……的”構文の意味と論理」、『言語と文化論集』第 24 号。神奈川大学大学院外国語学研究科。 pp. 187-204。

〈英語文献〉

- Chao, Yuen Ren. 1968(2011). *A Grammar of Spoken Chinese*. Berkeley : University of California Press. (《赵元任全集》第三卷。北京：商务印书馆。)
- Huang, C. -T. James. 1982. *Logical Relations in Chinese and the theory of Grammar*. MIT Doctoral dissertation, Cambridge.
- Cheng, Robert. 1983. Focus Derives in Mandarin Chinese in T, Tang, R. Cheng, and Y. -C. Li(eds.) *Studies in Chinese Syntax and Semantics*. 学生书局，台北

用例出典

「小説」

- 路遥 1986. 《平凡的世界》。北京：北京十月文艺出版社。

「テレビドラマ」

- 《家有儿女 第一部》(2005)